

お邪魔します! あのメジャー 石橋圭介准教授: p.20

INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY **ICU ALUMNI** ASSOCIATION 3-10-2, Osawa Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 TEL&FAX: 0422 33 3320 https://www.icualumni.com/ E-mail: aaoffice@icualumni.com ALUMNI NEWS VOL.135 SEPT.2021



特集

座談会:同窓生が語る リベラルアーツ流SDGs経営とは

SDGsという言葉が市井に広がっている。2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された 「持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)」の略ということは、皆さんもご承知だろう。 近年、民間企業の関心も高まり、「サステナブル推進室」といった部署を設けて全社を挙げて取り組んだり、 環境報告書から発展した「統合報告書」でSDGsへの取り組みを広く発信したりする企業も増えている。 アラムナイニュースでは企業の経営幹部に就いた同窓生に声をかけ、今まで取り組んできた経営のSDGsの側面に焦点を当てた座談会を企画した。



文・写真(座談会風景のみ):望月厚志(本誌) 写真:各氏

酒井綱一郎さん (さかいこういちろう/25 ID81)

ジャーナリスト、元日経BP副社長・日本経済新聞出版社副社長/教養学部社会科学科1981年卒業後、毎日新聞東京本社入社。88年日経BP入社。日経ビジネス記者、副編集長、ニューヨーク支局長などを経て、2001年日経ビジネス編集部長、04年同発行人。日経BPで「日経ESG経営フォーラム」を立ち上げ、月刊誌『日経ESG』を創刊。現在はTBSラジオ「森本毅郎スタンバイ!」のコメンテーター。ICU法人理事のほか社会福祉法人やNPOの理事なども務める。近著に『真実を見極める力』(総合法令出版)がある。



有馬利男さん (ありま・としお/10)

グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン代表、国連グローバル・コンパクト・ボードメンバー (2007-18)、元富士ゼロックス (現富士フイルムビジネスイノベーション) 社長/1967年教養学部社会科学科卒業後、富士ゼロックス入社。96年 米Xerox International Partners社CEO、2002年富士ゼロックス代表取締役社長。2011年10月より現職



東哲郎さん (ひがし・てつろう/16)

元東京エレクトロン社長兼会長/1973年教養学部社会科学科卒業、77年東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了。77年4月、東京エレクトロン入社。90年取締役、94年常務取締役、96年代表取締役社長、2013年代表取締役会長兼社長。16年取締役相談役、19年6月退任。米SEMI名誉役員、日本半導体製造装置協会顧問。2021年経済産業省半導体・デジタル産業戦略検討会議座長。21年5月、日本経済新聞に「私の履歴書」が掲載。



藤田直志さん

前日本航空取締役副会長/1981年 教養学部社会科学科卒業後、日本航空入社。2010年執行役員旅客営業本部長アジア・オセアニア地区担当、14年取締役専務執行役員、15年取締役専務執行役員兼ジャルセールス代表取締役社長、16年日本航空代表取締役副社長執行役員、2020年取締役副会長、21年より特別理事。21年6月公益財団法人日本体操協会会長に就任。



近江静子さん (おおみ・しずこ/33 ID89)

JPモルガン・アセット・マネジメントインベストメント・スチュワードシップ統括責任者/1991年大学院比較文化研究科終了後、エス・ジー・ウォーバーグ証券入社。リーマン・ブラザーズ証券、クレディ・スイス信託銀行を経て、2003年ソシェテ・ジェネラルアセットマネジメント(現アムンディ・ジャパン)入社。同社投資調査部長、ESGリサーチ部長。20年7月から現職。環境省「持続可能性を巡る課題を考慮した投資に関する検討会」委員、経産省「グリーンファイナンスと企業の情報開示の在り方に関する「TCFD研究会」」ワーキンググループ委員なども務める。

tainable elopment ls

【国連グローバル・コンパクトの10原則】

人権 1. 企業は、国際的に宣言されている人権の保護を支持・尊重し、

2. 自らが人権侵害に加担しないよう確保すべきである

労働 3. 企業は、結社の自由と団体交渉の実効的な承認を支持し、

4. あらゆる形態の強制労働の撤廃を支持し、

5. 児童労働の実効的な廃止を支持し、

6. 雇用と職業における差別の撤廃を支持すべきである

環境 7. 企業は、環境上の課題に対する予防原則的アプローチを支持し、

8. 環境に関するより大きな責任を率先して引き受け、

9. 環境にやさしい技術の開発と普及を奨励すべきである

腐敗防止 10. 企業は、強要と贈収賄を含むあらゆる形態の腐敗の防止に取り組むべきである

酒井:今日はリモートですが、お集まりいただきありがとうございます。まず、SDGsやESG (Environment、Social、Governance)など用語が混在しています。有馬さん、言葉の整理をしていただけますか。

有馬:SDGsはゴールです。到達すべき目的と言ってもいいと思います。 ESGは、活動の切り口だと思います。 酒井:近江さん、一般的にはESGの方がどちらかというと投資に関して使われる用語という理解がありませんか。 近江:私たち投資サイドではESGという言葉をSDGsより使っています。 ある企業を分析する上で、とりわけその環境・社会・ガバナンスに関係する項目というものについて精査をするということです。

酒井:企業経営の立場で言えば、特に 日本企業においてはそのガバナンスの ところがまだ未整備な状態ではないで しょうか。

東: 私はガバナンスにずっと注目して 会社経営をやってきました。社会と会 社と個人を、一貫してつないでいるの はこのガバナンスです。

このガバナンスがちゃんと効いた経営がなされてないと、もちろん社会との繋がりにおいても、社会に貢献するような企業であるのかどうか、あるいは株主の期待というものに応えようとする経営をしているのかというような観点からも気づかないうちに大きなゆがみが生じてしまいます。会社の中できちんとガバナンスの効いた経営が透明度高く行われていれば、そこで働く個人も仕事に対するモチベーションが

上がります。

藤田:経営会議の席で例えばこんなこ とがありました。ある企業との提携で、 その案件を実施するとうちが8割儲か ります、提携先は2割儲かります―― という案件があった。そうしたら、経 営破綻後に日本航空の会長に就任し会 社再生に取り組んでおられた稲森和夫 氏(京セラ創業者)が激怒したんです。 「自分のところが8割儲かって相手は 2割って、どういうことだ。商売って のは5割5割だ」という訳です。つま り、稲森氏がおっしゃったのは、その 商売に大義があるのか。それを踏みは ずして自分だけが良かれと思って経営 をしちゃいけないということを言った のです。こうした経験もあり取締役会 で議決するときには必ず大義を皆で確 認して、それが本当にあるのかどうか を確認しながら経営判断をしています。

もうひとつは株主との対話です。すべてガラス張りにする。日々起こる運航のイレギュラーやいろいろなインシデントはすべてWebサイトで報告していこう、世間に公にしていこうという姿勢を持ち続けています。それから株主に対しても正直に、IRの対話の際も自分たちの内情を正直に説明するということを地道に続けていくことが大事だと思っています。

酒井:日本航空の場合は、ESGという言葉をよく使いますか、SDGsをよく使いますか。

藤田: ESGは経営の柱になっています。 ESGの項目の一つひとつに、貢献するSDGsの項目がひも付くかっこうで 認識しています。

SDGsより前に始動したグロ ーバル・コンパクト

酒井:気候変動は誰にとっても切実な 問題になってきています。「強欲な」 欧米の投資家が突然「SDGsを」と言 い出したのは不思議な気もします。リ スクに対してセンシティブになってき たということでしょうか。一方、有馬 さんはグローバル・コンパクトでは SDGs制定前から活動されていました。 有馬: SDGsの前はMDGs (Millennium Development Goals) でした。90年 代にグローバル企業が環境破壊や児童 労働などさまざまな問題を引き起こし ましたが、当時のコフィー・アナン国 連事務総長が「国連だけでは対処でき ない。企業と一緒にグローバル市場を 作ろう」と2000年に設立したのが国 連グローバル・コンパクトです。人権、 労働、環境、腐敗防止――の4つの領 域で10の原則を掲げています。その 2カ月後、同じアナン氏の手によって MDGsが作られたのです。MDGsは SDGsと違って途上国の課題を取り上 げていました。当時の南北問題が強く 影響したと思います。2003年には日 本の組織グローバル・コンパクト・ネ ットワーク・ジャパン(GCNJ) がで きました。

国連グローバル・コンパクト (UNGC) には、世界の61カ国にネットワーク組織があって、1万7500くらいの加盟者があります。UNGCは国連総会で、SDGs推進の中核組織と指定されています。GCNJの方は、現在420社くらいの企業や組織が加盟し

東京エレクトロンの地球環境への取り組み

当社事業活動による 貢献

半導体の 低消費電力化





当社製品における 取り組み

省エネ、高稼動率、 高歩留まり装置



私たちの技術でICTの発展と環境負荷低減の両立に貢献

TEL

ています。加盟企業の中堅スタッフが中心になって、2700人くらい参加している分科会組織があるんですが、人権問題や気候変動など14の分科会があります。それから「明日の経営を考える会」という、次の世代の経営者の候補を企業のトップに推薦してもらい、1年間のプログラムに参加して、お互い切磋琢磨するという会を作っています。

酒井:グローバル・コンパクトは、SDGsの前からできていた。つまり、SDGsのための組織というより、国連が掲げた目標をいかに各国で達成していくか、そのための人材をいかに育成していくかということですね。近江さん、さまざまな企業がグローバル・コンパクトに参加している背景についてどう見ていますか。

近江:グローバル・コンパクトの10 原則はとても重要です。企業でここに問題があったらもう投資不適格というぐらいに見られていると思います。我々としてはESGを見る上でさまざまな視点から検討しますが、なかでもこの10原則というのは基本中の基本になっています。私の会社だけでなく、各運用機関は、企業が経営する中でその子会社や海外の拠点なども含めて、そこを精査していると思います。

酒井:東さんにお聞きしますが、企業は統合報告書やSDGsレポートなどを毎年出すようになってきました。ところが機関投資家と話すと、報告書にはいろいろ書いてあるけど、結局一番大

事なのはトップの姿勢ですよという話になります。藤田さんの言う大義みたいなところもあると思うのですが、その辺はいかがでしょうか。

東:先ほどの藤田さんとちょっと観点 が違っているのかもしれないですけれ ど、東京エレクトロンで特に強調した のは、「利益を重視しよう」というこ とだったわけです。その利益というの は何かっていうと、社会に貢献して初 めて生まれるんだ、そういう考え方で 利益を重視する。社会に貢献できなか ったら利益は生まれないのだと定義を し直しました。そういう観点で社会を 考えると、半導体とかIT関係にはプラ スの方向も大きいのですが、マイナス 面で見ると非常に消費電力が大きくな ったりいろいろな影響が出てきていま す。半導体そのものが消費する電力と か、IT関係で消費する電力とか、非常 に大きい。

それは電力だけではなくて、水や、さまざまな材料に関してもそうですが、それを本当に低減させていくことを考えた場合に、やはりサプライチェー緒にやってもそうなきゃいけない。我々と一緒にやって同じように努力していかできていかができるというにこれを考えてどりいうからにこれを考えてどりしていたがどういうふうにこれを考えてどりしての付け方というのが一企業だけではなく、一緒にやるパートナーに対しても大きな影響力を出してくるというこ

とがあります。投資家の方もそこら辺 を注目してみるということが非常に重 要なことじゃないでしょうか。

サプライチェーンと人権

酒井:藤田さん、日本航空の場合は気 候変動のところにはかなり力点を置い て、燃料とかエネルギーに対する取り 組みなどを積極的にやられていますね。 藤田:気候変動については以前からさ まざまな取り組みを実施してきました が、CO。削減は航空会社で一番の大 きな課題です。飛行機を飛ばす燃料自 体コストも高いのですが、自動車のよ うにすぐに電気飛行機や水素飛行機に という訳にはいきません。しかし、こ こ数年の動きを見ると自分たちの経営 の将来を左右する大きな課題という認 識のもとに、全力でCO2削減に取り 組もうという動きがかなり顕著になっ てきています。2050年にネット・ゼ ロエミッションという目標を設定し具 体的な取り組みを進めています。これ をやらなければ、公益事業として生き 延びられないという意識が高まってい ます。

酒井:もう一点、東さんがおっしゃったようなサプライチェーンの問題、つまりいろいろな取引先も含めてSDGsをやっていかなければいけない、というところはありますか。

藤田:あります。航空事業は、例えば、 世界各地で機内食の調達、その原料の 調達元、備品などと裾野が広い。日本 ではガバナンスが効いても、海外の先 の先まで行くと本当にそれができているのかということがすごく複雑になっているので、一つひとつチェックしていきます。自社だけではなく、取引先、さらにはその先のところまで目を配ることがかなり今求められていると思います。

酒井: 有馬さん、例えばITをみんなクラウドにしたら大変な電力が必要になるように、地球全体で見ると、あるところにとってはいいことでも、実は全体を見ていないと大変なことになりますね。

有馬:そうですね。新疆ウイグル自 治区の綿花は良質でコストも安いの で、世界の多くのアパレル業者が使っ ているのですが、昨今ウイグルではさ まざまな人権問題が取り沙汰されてい る。日本など先進国の素晴らしいファ ッションも、そのサプライチェーンが 問題となります。その大もとは、実は 2011年に国連で決議された「ビジネス と人権に関する指導原則」という枠組 みが原則です。それに対し日本政府は、 世界で24番目でしたが、2020年にな って「『ビジネスと人権』に関する行 動計画」を策定しました。これを受け て、多くの日本企業が「人権方針」を 作り「人権デューディリジェンス」に 取り組んでいます。

グローバル・コンパクトの10原則はガイドラインというよりも基本原則なのです。原則に沿ってみんなが動いていくという「プリンシプル」です。ESGを推進している組織は「国



連投資原則(PRI)」ですが、そのP はPrincipleです。原理原則を決めて、 世界中がそれぞれ従って動いていき、 それに外れたら生きていけなくなる枠 組みができつつあるような気がします。 酒井:今、人権の話が出ましたが、 SDGsの17の目標の中でも、特に日 本が弱いところの一つがおそらく人 権ではないでしょうか。中国の工場が 新疆ウイグル自治区でウイグル族を強 制労働させている実態が明るみに出た。 オーストラリア戦略政策研究所によれ ば、強制労働させている中国企業と取 り引きしている日本企業が14社あっ た。その後ヒューマンライツ・ナウと いう人権NPOが各社に問い合わせた けれど、納得できる答えはあまり返っ

てきていないようです。

近江:人権は確かにその通りですね。 特にサプライチェーンのトレーサビリ ティーは、複数の商社が入るなどの理 由で先の先まで分かっていない企業は 多いです。開示されていないだけでな く、本当につかみきれていない。そう するとモニタリングでもそこまでやり きれていないことになってくるので、 結果として人権の問題が出たときに大 変なことになってしまいます。

もう一つ、人材活用の部分でも、海 外を巻き込んで大きくなっていくとき に、グローバルの人材管理マネジメン トシステムがちゃんと機能しているか という問題があります。親会社はやっ ているけれど海外現地法人はよく把握

できていません、という具合です。た とをやっていないのかといったことも、

サプライヤーの評価の中にちゃんと入 れていかないといけない。ですが、そ ういう項目はまだ入ってないところが 結構多いのではという気がします。

もう一つ、私は2013年に米国の同 業Applied Materialsという企業と東 京エレクトロンを経営統合しようと動 いたのですが、そのときに米国に何度 も足を運んで社員と話をしました。そ こで認識したのは私達の企業はグロー バルに人材を活用していないというこ とです。同社ではもう「グローバル」 という言葉を使わないぐらいいろい ろな方が働いていて、なおかつ、世界 各地域の人材の評価をきちんと本社で 分かるような仕組みができていました。 東京エレクトロンはまだまだだなとそ

Working Better Cloud ご紹介動画

はたらく人と職場のウェルビーイングを

向上させるため企業に解決策を提供する

新プラットフォーム『Working Better C**l**oud』の

ご紹介動画も、ぜひご覧ください!

https://www.peacemind.co.jp/

管理部 人事総務グループ長 小島 真理 (ID87)

とえば女性管理職比率一つにしても、 なかなかグローバル全体ですぐに出て こない場合もあります。「社会」の部 分が少し弱い印象です。気候変動とか 環境に関してはある程度日本は進んで いる方だと思いますが、社会の「人」 のところ、人権も含めてすごく課題が あるし、開示情報が少ないと思います。 東:「人権」で考えた場合、サプライ チェーンでサプライヤーの納期、価格、 品質などで評価していくことは一般的 に行われていますが、ではいわゆる環 境負荷に対して注意を払われているの か、それから人権に関して、このサプ ライヤーでは人権を無視するようなこ



PEACEMIND

私たちは、「はたらくをよくする®」会社です。

ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、 心豊かな未来を創る」をミッションに 1998 年に創業した 「はたらくをよくする」ソリューションを提供している企業です。 職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の 人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の方からのご相談 をお受けしています

また、国内外のグローバル企業の成長支援を一緒にチャレンジして くれる仲間も募集しています。



ピースマインド株式会社 代表取締役社長·共同創業者 荻原 英人(ID00)

Working Better Together®

「はたらくをよくする」ために、はたらく人と職場を支援する様々な専門サービスをご提供しています。

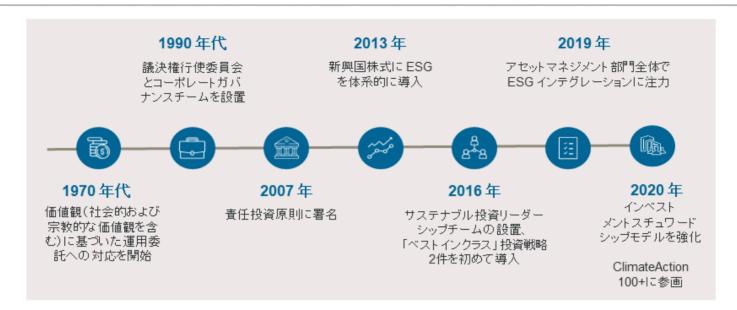


1,200社/年

ービス開始から お取引企業 外資系顧客構成比 03-3541-8660 22年



J.P. モルガン・アセット・マネジメントにおけるサステナブル投資への取り組み



ESG*は我々のDNA

それぞれの戦略について、重要視するべき財務的要素を200人以上のアナリストが検証し、**ESG**要素としてシステムへ統合

掘り下げたリサーチ

様々なサステナビリティーのテーマ に対して議論するチーム及び アナリティックスを用意

顧客に合わせた ソリューション提供

グローバルのスケールと視点から 生まれる情報を駆使し、 サステナブル投資の ソリューション提供

*ESG (環境・社会・ガバナンス) 出所: J.P. モルガン・アセット・マネジメント(2020 年 3 月 31 日時点)



の時に思いました。

さらにもう一つ、日本でダイバーシティという場合、特に女性について考えた場合に、非常に間違えているとか働き方をする女性を登用していこうとすることです。それは別にダイババウシティではなくて、姿格好が違うだけまってはならな大変を重視した経営とは言えない。女性なら女性が得意とともような分野の能力を発揮することをような分野の能力を発揮することをもらうとしてうような考え方に立たないと、日本の場合は、いつまでたっても男性社会から抜け出だせないのではないでしょうか。

考え抜くのが リベラルアーツ流SDGs

酒井:今、グローバル人材の話、グローバル人材管理の話がありました。もう一つがダイバーシティの話。この二つに絞ると、結構ICU的な話になってくるかと思います。

藤田:酒井さんと私はカナダハウスに 4年間暮らしましたが、そこの寮母さ んだった塚田さんのことがとても印象 に残っています。確かネパールでバセ ドウ氏病の看護にあたられていたとい う経歴の方でした。いかにも物静かな クリスチャンではなく、誰でも受け入 れる。そして暖かく、時には厳しく人 としての生き方を教えてくれました。 こういう人間になりたいなと私は学生 時代に思いました。その出会いがICU を卒業して社会に出ても自分の中では 柱になっていると感じましたね。

それからダイバーシティといえば、 私は健康経営の責任者もしていました。 その経験から、職場にはさまざまな事 情をもった社員がいることをいつも認 識していました。健康な社員もいるし、 がんのサバイバーの方も、子育て中の 人もいる。例えば、子育て中の人たち が午後4時ぐらいに帰るときに、「あ の、すみません帰ります」って言う。 みんなが働いている時に先に帰るのが 申し訳ない、みたいな意識なのですね。 そうではなくて、制度を変えてあげれ ば、堂々と「皆さんお先に帰ります」 と言えて、周囲も「頑張ってね」って 言える。そういう職場にすることがと ても大事だと思っています。

LGBTQ、人種、宗教とさまざまな 社員が同じ職場で働いていますが、私 にとってはカナダハウスでの経験が一 番大きい。同じ部屋にいろいろな国・ 地域の学生と4年間暮らして、その辺 の違和感は自分としてはあまり感じな いというのは、ICUの卒業生としてす ごく良かったなと感じています。

有馬:学生時代を振り返ってずっと 思っていることですが、「何のために これをやるんだ」という気持ちですね、 私の場合。卒業して会社入って何のために仕事するのかというのがものすごく大きなテーマでした。ずっとそれを考え抜いて大学にいたような気がします。何のためということを徹底的に考え抜くメンタリティ、生活態度は得られた気がします。

何のためにSDGsをやるんだというのも徹底的に考える。SDGsは社会のため、あるいは環境のためにやるのか、本音はそれで儲けようと考えているのか、といったあたりがあやふやなまになんとなくファッションでみんなやるからやろうみたいな流れになってとないうことに対してもっとは、そういうことに対してもっと根底から物を考えて、きちっとやるべきことをやる。それが長い目で見ると、企業の強さとか人の強さとかにつながっていくのではないのかなと思います。

酒井:今すごく示唆を受けたのですけども、2022年度から高校で、いわゆる探求学習(生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動)をテーマにした科目が入ってきます。まさに今有馬さんがおっしゃった「考え抜くメンタリティ」を育むものです。記憶するのではなくてとにかく考え抜く教育が新しい転換として今入ってき

ている。リベラルアーツはそういう面 でもかなりいいのではないでしょう か?

近江:有馬さんがおっしゃった通りか なと思います。考え抜くことと、も う一つ「偏見をもたない」でしょうか。 ICU生は、一つの思考にとらわれずに いろいろな側面から再考することが他 大学よりもできる環境で学ばせてもら っているのかなと思います。私もその おかげで助かったことがあって、例え ばESG って今こんなにブームみたい ですけど、私がESGに携わり始めた 頃は日本の投資家は誰もESGを重視 していなかったのです。もう投資家の 中で皆財務を一生懸命見て企業の収益 が上がるか下がるかみたいな話に終始 していたわけです。その中でESGを どう考えるか、それを考えることは何 の企業価値に結びついているのか。こ こは、ある意味でイマジネーションが ないとなかなか埋まらない。投資家は 「ESG見たからって株価が上がります か」とか「利益は上がりますか、むし ろ下がるんじゃないんですか」という ことにすごく拘泥していたわけですね。 ただ私は「それは違うんじゃないん

ですか」と考えられるだけの多面性が自分の中にはありました。結果的に収益を生み出している組織というものの強さは、もっとホリスティック(全体)な形で見ていかなきゃいけないと

いうことが素直に納得できたのです。 ICUの教育の中に何かしらにそういっ たヒントがあるのかもしれないと思い ます。

一面だけ見てその中で良し悪しで競 い合っていると、ものごとを見る多様 な視点は出てこない。特にESGはそ ういう訓練だと思うんですよね。

ESGが注目され始めたころ私が最 初にいろいろな会社の説明会に行くと、 企業がESGを説明するのに、環境に 対する取り組みをこういうふうにやっ ていますと一生懸命説明してくれま した。それを聞いてすごいなとか、こ れによってこの強みがあるのだなとか いろいろ思ったのですけど、でも多く の投資家たちはそれを聞いて、「それ がどうやって企業価値に結びついてい るか説明してください」というわけで すね。でもそれはやっぱり自分で考え ることじゃないですか。そこにこそ投 資の醍醐味もあるし、運用のプロとし てはそういうところを考えていかなき ゃいけないと思うのです。それなのに、 受動的に企業がそれを説明してくれる のを待って、説明が出てこないのであ れば、それ(環境への取り組み)を企 業価値に織り込む必要はないじゃない。 だからやっぱりESGって意味がない よね――みたいな発想の人が多かった。

今もちろんそんなことはないんです けど、そういう短絡的な思考というの は結構あったんですね。私もESGに 関わるようになってICUの卒業生と結 構出会うようになってきて、割とそう いったところに散らばっている。いろ いろICU人材が実はいるんだというこ とを発見しています。そういった意味 では本当にいい大学だったんだなと私 は思っています。

東:有馬さんの「何のために」とか、 それから「考え抜く」「とらわれない」 という姿勢は、ICUの場合、非常にみ んな真面目にやっている感じがしま す。普通だったら真面目に話したり考 えたりするのは、みっともないような 外見上は恥ずかしいようなイメージが 多少あると思いますが、ICUの場合に は、そこがとてもいい文化だと思いま す。スタンフォード大学の西義雄教授 の話ですが、日本人とその他の国と比 較した場合に、日本人留学生は非常 にまじめに考えるが、この「How to」、 要するに課題が与えられた場合にそれ をどういうふうに解決するかに関して は非常にたけている。ところが何が課 題であるかということに関しては、日 本人からなかなか話が出てこない、と おっしゃっていました。何が課題なの かということがわからないで、与えら れた目の前にあるものの解決という話 になっていくと、やっぱりESGとか SDGsとか、そういう視野の広い、大 きいものに関してはなかなか捉えにく い。そんな意味合いで言っても、ICU の文化、根本的に考え抜いたり、ディ スカッションもできるということが非 常に重要で、そこはリベラルアーツの 根本のところという気がします。

酒井:今までのお話は、もともと有馬 さんがこの座談会の前に問題提起をさ れていて、私達はSDGsでこういうこ とをやりましたとか、私達もSDGsに 参加していますとか、ブームのような 表層的な部分がある中で、もう少し本 質を問うべきだという議論を提起され ていました。今まさに皆さんのお話が それに対する答えになっていると思い ます。

有馬:やっぱりそこだと思いますね。 もちろんいろんな側面があって、例え ば企業は何のためにあるのかという考 え方に最近変化が起きています。株主 資本主義、株主のために仕事するんだ というところから、日本や米国の経済 の指導者たちが集まったビジネスラウ ンドテーブルでも、「もうそうではな い。ステークホルダーのために企業は 仕事するのだ」と宣言して、変わって きている。ESGでも、財務指標的な 収益だけではなくて、非財務的な効果 というもののために仕事をする。会社 の経営の考え方、あるいは経営の哲学 をそういう意味で考え抜くようなこと

をやらなければいけないと私は思って います。そういった本質の議論がこれ からもっと出てくるのではないでしょ うか。

コロナ禍で重要視される "働き方"

酒井:最後に、コロナの現状の問題と、 コロナ後の問題について。グローバ ル・コンパクトではどのような分析を していますか。

有馬:毎年実施している実態調査の中 で、ポストコロナで何が大事なことで すかと経営者に質問をしてみたところ、 事業継続計画(BCP) を作り直したと いう企業が90%以上ありました。も う一つは、92%以上が働き方改革と それに見合った人事政策などの見直し を考えていました。今は働き方改革と テレワークに対応した人事評価といっ たようなことですけれど、かなり多く の企業がそのように動いているように 思います。

東:テレワークの重要さが見直されて IT関係が爆発的に成長しています。私 がちょっと心配しているのは、このオ ンラインでのコミュニケーションを毎 日、何時間も連続的にやっていった場 合に、会社に行って働いていたときと 比べ非常に疲労感が強いということで す。オンラインは時間や空間を飛び越 えて非常に便利と思われていますが、 本当はこれまでの人間や自然の時間感 覚とか空間に対する感覚を破壊して いるのではないでしょうか。「破壊」 がおおげさならば、大きく変化させて いる。そしてそのダメージが来ている かもしれない。働き方を考える場合に、 オンラインをうまく活用する側面と同 時に、オンラインに伴う危険性をちゃ んと認識し、その危険を回避するよう に、例えば人と人との繋がり、良い対 話あるいはempathy、思いやりなど も重視する働き方の仕組みを作ってい かないと、かなりおかしくなるのでは ないでしょうか。

酒井:藤田さん、日本航空はコロナが

雇用の問題まで影響して、それに対して いろいろな形で雇用を守っていますね。 藤田:コロナの襲来でお客様の9割が いなくなってしまいました。まさに会 社存亡の危機に直面しました。その中 で経営判断として全社員の雇用を守 るということを確認しました。そし て、まずやったのは資金手当です。幸 いにも財務基盤を相当強くしていたの で、キャッシュの手当はちゃんとでき ていました。次に3万数千人の社員で すが、企業理念に戻って日本航空は社 会の進歩発展に貢献する会社であるこ とを社員とともに確認しました。そし て、みんなで社会に貢献することをや ろうではないかと、社外のいろいろな 職場、それは会社が指定するだけでな く、自らが自主的に探してくるような ところも認めました。また誰ひとり一 時帰休をさせず、さまざまな教育プロ グラムも用意した。それによって社員 が日本航空の経営哲学の原点に戻って、 自分たちが何をすればいいか主体的に 考えるようになりました。家電量販店 に行ったり、地方で農業やったり、検 疫の仕事のお手伝いをしたりと貴重な 社会体験をして一人ひとりが成長して います。コロナ禍が終わって、事業が 再開したときに、従来と全く違う会社 に生まれ変わるんじゃないかとすごく 期待をしています。

近江:コロナを経て投資家として思う ことがあるとすれば、企業のカルチャ - の強さが試されるということだと思 います。ESGもSDGsも上っ面だけ でやっていないかどうかが試されてい ます。経営者の危機意識というものが 企業の価値創造の中にしっかりと取り 込まれていることがとても大事なんだ と思います。そして、どこまでトップ のビジョンが、末端の従業員にまで浸 透しているかが重要です。

酒井:今回、SDGsやESGといった 課題に対し深い議論ができたと思いま す。ありがとうございました。

腰痛・頭痛・自律神経失調症を改善したいあなたへ

ICU卒業生の佃隆(44期ID00)とパートナーの佃美香が27年間運営しており、毎年1万人以上の 方が来院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院には、ICU関係者の方が来院者の4割を 占めています。当院では、関節の動きが鈍く神経の流れが悪くなっている箇所とあなたの症状との 関連性を分析し、症状の原因を特定します。独自のつくだ式カイロプラクティックケアによる治療、 「『姿勢の魔法』シャキーン!」メソッドによる知識、分子整合栄養医学による栄養の3本柱によって、 症状改善だけでなく、姿勢矯正、ひいてはあなたの理想の暮らしを送る健康サポートをします。 ICUとご縁のあるあなたのお役に立てましたら幸いです。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

「ICUアラムナイニュースを見て・・・」とお電話ください。 〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平嶺ビル301号室

0800-888-4270 受付時間 ▶ 8:30~20:00



web http://mitaka-chiro.com

当院院長佣降は

■1日3回で、ねこ背がよくなる「姿勢の魔法」シャキーン! ■姿勢をよくすると、人生がきらめく!

の2冊を出版しております。







パンフレットの表紙



キャンパス・マップ

小特集「コロナ禍、新入生向けの絵本」

新型コロナウイルス感染拡大によって、一時全授業がオンライン開催になるなど、大きな影響を受けたICU。中でも最も負担を受けたのは、コロナ禍に入学した新入生たちだろう。せっかく入学したのに、キャンパスに足を踏み入れることはできず、友達を作る機会もない。そんな新入生(ID24)たちに向け、一人の先輩が自作のキャンパスマップやICU用語集などが載った絵本調の冊子「#24 パンフレット」を作り上げ、大学の許可を得て配布した。制作の経緯や、絵本に込めた思いなどを聞いた。

文・写真: 滝沢貴大(本誌)

「森野狐」というハンドルネームで パンフレットを作ったのは、西川千 晴さん (ID20)。この 6 月にICUを卒 業したが、制作当時は現役学生だった。 作り始めたのは昨年の春。きっかけは、 コロナ禍が深刻化し、大学が全授業の オンライン開講に舵を切ったタイミン グに、SNSで何人かの新入生とつな がって覚えた危機感だった。「『せっか く勉強してICUに入学したのにキャン パスに行けない。オンラインで授業も 楽しくない。大学に通う意味を感じら れない』。そんな投稿を見て、先輩と してこの子たちに何かしてあげられな いか、『ICUに来て良かった』と思っ てもらいたいと思った」。得意の絵や 文章を生かして、大学ができないアプ ローチで新入生のためにできることを 考え、冊子を作ることを思い立った。 そこから約半年間、制作作業にあたり、 昨年の9月ごろに完成。自腹を切って 発行し、大学側の協力で図書館内に設 置したほか、学生向けのポータルサイ トにも掲載。新入生を中心に、反響は 大きかった。

「学生目線の情報」にこだわり

パンフレットはA5版全32ページ。

イラストは描き下ろし、文面やレイアウトも自分で考えた。誰かに疎外感を与えないため、人種やジェンダーのレパートリーを広くした。内容はできるだけかみ砕き、言葉使いは絵本のように柔らかくするなど、こだわりをふんだんに盛り込んだ。

キャンパスマップは、学生生活に直結する建物のみにフォーカスし、大学が公開しているものよりもわかりやすさを重視した。説明文には、南門には「ラーメン屋が近い」、図書館には「2階は夕日の光がキレイに入る」といった一文を入れこんだ。大学の公式資料では伝えづらいが、本来であれば先輩から教えてもらったり、キャンパスを歩いていて気づけたりする情報を盛り込みたかったからだ。

「セクメ」「イニシエ」「ハイ上がり」などのICU用語集を盛り込んだのも、同じ理由から。遊び感覚でオススメのメジャーを知れる「メジャー診断」や、全メジャーの簡単な紹介も、「学生目線の情報」という点にこだわって掲載した。SNSで20、30人ほどのICU生から情報収集をしたという。

また、西川さんは「一番伝えたかっ たのは、実は最後の方のページ」。冊 子の終盤、「森の知恵」と題して、絵 本調に思いの丈を盛り込んだ。

「距離が必要などうぶつもいる。 大切にされないのにそばにいるのは、 愛の強さじゃなくて自分の弱さかも しれない」

「僕らは、何をしても、何をしなくても、素敵ないきものだ。何をして も、何をしていなくても高価で尊い」

キツネやハリネズミなどの動物のイラストとともに、そんな言葉を並べた。 続くあとがきにも、「ここは迷子になっていい森です」などといった1年生へのメッセージをつづり、「ようこそICUへ」という言葉で締めくくった。

「『ICUに来てくれてありがとう』と伝えたくて。私はクリスチャンで、イエスさまにならっているところもあるが、お腹をすかせている人、悲しんでいる人には、話を聞いてもらうより先にそれを満たす必要があると思う。1年生たちに『あなたたちに会いたいよ』『友達になりたいよ』と伝えたいけど、まずは満たされていない彼らの『大学へのワクワク感』を満たしたいと思って、作りました」

新入生の一人「ICUに入学した 実感がわいた」

昨春の新入生で、絵本を読んだ一人、 鈴木悠希子さん(ID24) は「先輩に聞 かないとわからないような、オフィシ ャルな資料には書いてない豆知識など が載っていて、ICUに入学した実感が わいた」と話す。北海道出身で、当初 は寮に入る予定だったが、コロナ禍で 立ち消えになり、春学期は北海道の実 家にとどまり、そこから受講すること を決めた。オンラインといえど授業が 始まり、SNSで情報を集めてユネス コクラブやICU祭実行委員会などのサ ークルに加入して知り合いもできたが、 「オンラインだと情報不足がネックだ った」という。「その場の空気感がわ かりづらいし、会話がかぶったり、隣 の人と2人だけで話したりもできな い」。西川さんのパンフレットを通し て、得ることができなかった生身の情 報を得ることができた。「キャンパス に足を踏み入れていないし、右も左も 分からない状態が半年くらい続いた。 オンラインでの交流を通して、ICUに は親切な先輩が多いと思っていたが、 ここまで手を差し伸べてくれる人がい



ICU用語集のページ

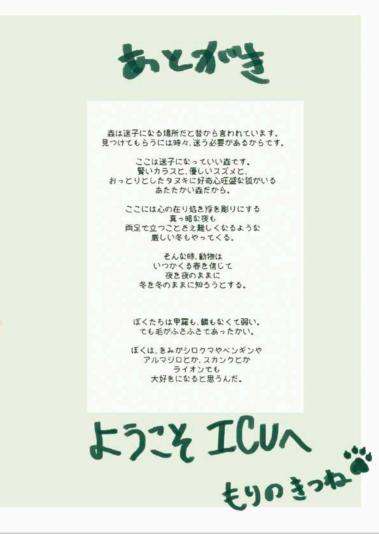
るということに感動した。すごくほっ とした」。西川さんの下には、他にも 多くの新入生から感謝の言葉が届いた。 「『ありがとうございます』とメールが 来たり、大学に行ったときに『パンフ レットのお陰で、ICU、好きだなって 思いました』と直接言われたり。作っ ている最中はネガティブな言葉を言わ れたりもしたが、感謝の言葉だけで作 って良かったと、かけた何時間もの時 間が無駄じゃなかったと思った。報わ れました

「絵は描いていないと 死んじゃうくらいの存在」

西川さんは幼少期から絵を描き続け てきた。高校時代は美術を専攻して いて、美大を目指したこともあった。 「絵は描いていないと死んじゃうくら いの存在」。しかし、「若いうちにたく さん勉強して絵に生かそう」とICUへ の進学を決めた。絵のほか、小説の賞 で入賞したり、ICU入学後は劇団で脚 本を書いたり、西川さんと表現活動は 切り離せないものだ。

当初は教職課程を受けたり、心理学 を学んだりするつもりだった。しかし、 前者は「何が正しいかわからない私が、 子どもたちに正しさを教えることに罪 悪感や違和感を覚えたから」、後者は 自分自身トラウマが多く授業を聞いて いられなかったから、という理由で断 念。そんなとき、森木美恵教授の授業 を受けて人類学に興味が湧き、そのま ま専攻した。卒論では、「ICU生のセ ックス観」について調査してまとめた。 「結論として、若者は恋愛やセックス に無関心になったわけではなく、真面 目すぎて臆病になったという結論を出 しましたし

将来の夢は「教授になること」とい う。理由を聞くと、「楽しい大人がい るほうがいいので、このまま楽しい



作者の思いが最も詰まった最後のページ

大人になって教授になりたい」と笑う。 現在は大学院進学を目指しつつ、フリ ーランスでの創作活動に取り組んでい る。オーダーメイドの絵本を作る会社 を立ち上げることも、もう一つの夢と

大学は卒業したが、今でもコロナ禍 で苦しい思いをしている現役生たちの ことを気にかけている。パンフレット の制作がきっかけでできた大学の部署 とのつながりで、1年生向けのアカデ ミックプランニングのWebサイト制 作に協力した。また、「目下の目標は、 バーチャル空間上でICUのキャンパス を再現すること」と話す。「ICUでの 思い出を振り返ると、授業後に立ち話 をしたこととか、深夜に滑走路を自転 車でこいだこととか、そんなことばか り。1年生や2年生は、そこが失われ ている。体がそこにいられなくても、 アバターでそういうことができたらい いのにと思って、何かできないかと試

行錯誤している」。実際に情報科学メ ジャーの教授から助言を受け、プログ ラミングの勉強を始めたという。

西川さんは「政府や大企業が取りこ ぼしてしまうものをすくい上げるのが 芸術。ICUにおいても、責任が伴うか ら大学ができないことを、どうやって 補うかを考えるのは大切だと思う」と 指摘する。「コロナ禍だからこそ、助 けを求められない人、大きなものに見 過ごされちゃう人たちにどう手を差し 伸べるかを考えていきたい」。これか らも、様々な取り組みを進めていくつ もりだ。



オンラインで快くインタビューを受けて下さった 西川千晴さん (ID 20)

≪ICU 同窓会の皆様へ≫ 三井住友トラスト VISA ゴールドカード 年会費を大幅割引!

VISA ゴールドカード

ロードサービス VISA ゴールドカード 期間限定キャンペーン実施中

ROAD SERVICE VISA GOLD 三井住友トラスト・カード SUMITOMO MITSUI TRUST CAPE 0123 4567 8901 VISA 通常年会費11,000円(稅込)

通常年会費12,100円(稅込)

2,750円(税込)

3,300円(稅込)

2 年目以降も ※家族会員年会費は 1,100円(税込)です。

キャンペーン期間:2022年4月30日まで 期間中にご入会された方全員に 000 円キャッシュバック!

※本会員・家族会員同時に ご入会の場合は、 <u>2.000 円</u>キャッシュバック



★ ゴールドカードの主なお役立ちサービス *海外・国内旅行傷害保険 *お買物安心保険

*空港ラウンジサービス *ワールドプレゼント *ロードサービス(ロードサービスVISAゴールドカードのみ)

詳しくはコチラ など



★ 同窓会にもメリット!!

カード利用額の一部が同窓会に還元!

※今後予告なくカードのデザインが変更となる場合があります。 申込書請求先 [MAIL の方は、ICU 同窓会員(50140)であることに加え <u>①お名前 ②ご住所 ③お電話番号</u> をご送信ください。] 回路原回

TEL 0120-370-070

 \bowtie MAIL Moushikomi@smtcard.jp $\Rightarrow \Rightarrow \Rightarrow \Rightarrow$

三井住友信託銀行グループ 三井住友トラスト・カード □ 発記: お電話受付時間:平日9:00~17:00(土・日・祝日・12/30~1/3休)

(取得した個人情報は VISA カード入会申込書を送付する事に限定いたします。) ※ご入会にあたっては、弊社所定の審査がございます。

同窓会年次総会 2021年もオンライン開催(桜祭り)

文:新村敏雄(本誌)

おさまる気配が見えないコロナ禍の中、2021年の同窓会年次総会(桜祭り)も前年に続きオンライン開催となった。当日(3月27日)は晴天に恵まれ気温も温かく、キャンパス内の桜は満開で、リアルであれば絶好のお花見日和の中での開催となっていた。

事前の参加申し込みは120人を超え、 当日のオンライン出席は90人を上回 り、コロナ感染が広がり始めたため初 のオンライン開催とした2020年の実 績(それぞれ82人、約70人)を上回 った。

総会議事では、2020年度決算について、新型コロナの影響により終身会費納入が大幅に落ち込み、非常に厳しい財政下での執行となったことが報告された。収入減少に対して20年目記念会費納入を募集する一方、活動のオンライン化などで不要不急の支出削減努力を続けた。

また、2021年度予算案についても、 引き続きコロナ禍において終身会費納 入率の劇的な改善は見込みづらいもの の、一部(オンラインではない)フィ ジカルな活動も再開しながら収支の黒 字化を目指すとの方針が説明された。

卒業50周年記念式典は、2020年が50周年だったもののコロナ感染防止のため急遽式典が中止となった14期生と、15期生とが合同でお祝いをすることとなった。

この日、16名がリモート参加した 14期を代表して挨拶を述べた梅津順 一氏は「入学した当初は牧歌的な雰囲 気だった大学が、やがて大学紛争の嵐 に巻き込まれ、卒業式もなくなってし まった」と50年前を振り返りながら も、自宅の庭に植えた柿の木が一代で は大木にならないように「ICUという 大学も何かを成し遂げるには何代もの 教職員や学生が必要」と指摘。「明日 の大学、明日の日本、世界のために働 いていこう」と結んだ。

続いて12名の参加があった15期からは森谷尚氏が挨拶。半世紀前に学んだこと、感じたこととして「寮長、サークルの部長、読書会の幹事などを通じ、組織の中で何らかの役割を担い、当事者として関わること」「生活のほ

ぼすべてがキャンパスで完結する環境の中で、自分で考えて行動すること」を挙げた。そして、大学生活の中で大学の雑木林の四季に心の安らぎや励ましを受けたことに触れ、「この環境が今後も維持されることを願う」と締めくくった。

今回の桜祭りでは、初の試みとして、コロナ禍のもとでの大学、とりわけ学生の現状について、加藤恵津子学生部長に「コロナ禍のICU生ライフ:これまでとこれから」と題して話していただく機会を設けた。

加藤部長は、2020年は大学にとって①学生の身体の健康、②絆と心の問題、③経済的問題という3つの課題にチャレンジする年だったと説明。①でコロナ感染対策としてオンライン授業や課外活動の制限などに踏み切った結果、クラスターの発生は抑止できたものの、自宅通学も含む学生の孤立や孤独という②につながった。更には保護者の収入減やアルバイトの喪失による③の問題にも波及していったという。

「2021年は、いかにして授業以外の

生活も取り戻していくかが課題」と結 論づけた。

③の経済的問題に対しては、同窓生に呼びかけた緊急支援募金により、秋学期150人、冬学期150人、春学期も50人に支援金が給付されたが、このコロナ募金に対して竹内弘高理事長より感謝状が贈呈された。竹内理事長は出張でボストン滞在中だったが、オンライン開催だったため参加が可能となった。

桜祭りの第二部であるDAY賞表彰 式の前の休憩時間には、ICU祭への寄 付を募る実行委員長のビデオメッセー ジが流され、終了後には、マクリーン 通りで待機していた実行委員が、桜の 開花状況を実況。キャンパスに行けず とも桜を楽しむことができた。

DAY賞表彰式後、例年なら懇親会へ会場を移すはずの14期、15期卒業生は、オンラインのグループに分かれるブレイクアウトセッションでそれぞれの同期会を開催した。

DAY賞スピーチ、今年も多彩な顔ぶれ

文: 櫻井淳二(ICU同窓会会長)

第16回目となるDAY賞表彰式は3 月27日オンラインにて開催された「桜祭り」において、同窓会総会に引き続いて行われた。今回の受賞者の皆さんは、まさに2020年という「年」のDistinguished Alumni of "the Year" に相応しい方々5人が受賞された。

表彰式では、はじめに司会である DAY賞選考委員の竹川隆司さん(44 ID 00) からDAY賞と今回の受賞者の 選考理由について説明があった。今回 の表彰式がオンライン開催となったため、受賞者の皆さんには事前に表彰盾 と記念品が贈られている旨お話があり、続いて受賞者のスピーチが行われた。

スピーチの最初は鈴木克明さん(25 ID 81 教育学科卒:熊本大学大学院教授)が行った。鈴木さんは日本教育工学会の会長をお務めになられ、日本のインストラクチャル・デザインの第一人者であるとのご紹介が、司会の竹川さんからあった。鈴木さんはまず、コロナ禍によりオンラインによる教育工学が注目を浴びることとなったが、コロナにより命を無くされた方々に対し

て心よりご冥福を申し上げたいと述べ られ、続いて鈴木さんがICUに入学さ れた理由について触れられた。鈴木さ んは教員であったお父様から「日本の 大学は緩すぎるから、日本の大学には 行くな」と常々言われており、日本の 大学らしくないICUを選んだとのこと。 ICUに入学した当初こそ皆英語が堪能 で強い劣等感を持ったものの、素晴ら しい先生方から教育工学の最先端を学 び大変刺激を受け、卒業後はフロリダ 州立大学に留学した。その後岩手県立 大学教授等を経て、2006年からは「E ラーニングによって、Eラーニングの 専門家を育てる」ことを目標にした熊 本大学大学院で教鞭を取られており、 今後もテクノロジーをどのように教育 の実践に活かしていくかに取り組んで 行きたいと抱負を述べられた。

お二人目は谷村格(いたる) さん(31 ID 87 社会科学科卒:エムスリー株式会社代表取締役) であったが、当日は残念ながら従前からのご予定がありご欠席となったため、事前にお送りした質問への回答とメッセージが司会の竹川さんより読み上げられた。谷村さん

は(お父様もICUの1期生)マッキン ゼー社を経て、医師向けオンラインサ イトのエムスリー社を立ち上げられた。 現在谷村さんが最も関心のあることは 「病に負けないで人生を輝かせる」こ とをコンセプトにした「CAN・NOW (かなう)」というプロジェクトで、末 期がんの患者の映画『最高の人生の見 つけ方』のように、生きているうち にやりたいことを叶えさせてあげるこ とだという。先日は子どもの頃に事故 で手を無くされた方から「生きている 間に自分の手で水を飲んでみたい」と の願いがあり、AIを使った筋電義手 を使ってその願いを叶えて上げること ができ、大変喜ばれたとのことである。 また、今後の目標については不要な医 療コストをできるだけ下げ、エムスリ ー社の現在の顧客数600万人を全世界 の医師数1200万人に近づけ、真のグ ローバルカンパニーとしてこれからも イノベーションを起こして行きたいと 締めくくられた。

続いて児玉治美さん(35 ID 91 社会科学科卒/G1994大学院修了:アジア開発銀行駐日代表) は、まず国会議

員の秘書として社会人としてスタート を切り、その後国連人口基金等を経て、 現在アジア開発銀行駐日代表をお勤め である。児玉さんからは人生を計画的 に進めようとしても思うようにはなら ないことが多いので、根底に自分の進 みたい道(児玉さんの場合は【途上国 援助+国際協力】がしたいとの自分の 道があったとのこと) がしっかりあれ ば、成り行きであっても人との出会い を大切に生きて行けばよいのではない か、と自分が歩んで来た道を振り返っ てお話をされた。また、ICU時代のア ルバイトや模擬国連での経験、リベラ ルアーツの学びが今となって大変役に 立っているとのこと。最後に、現在自 閉症のお子さんと認知症のご主人とお 暮しである児玉さんから、国際機関は 女性にとって働きやすいジョブ型の職 場であり、後輩の皆さんにも是非キャ リア形成の場として国際機関を勧める とともに、自分も皆さんのロールモデ ルとなれるようにこれからも頑張って 行きたいと抱負を語られた。

4人目は酒井里奈さん(39 ID 95 国際関係学科卒:ファーメンステーショ

ン株式会社代表取締役)からスピーチ が行われた。酒井さんは、DAY賞の 連絡を頂いた当初は、歴代の受賞者が 立派な方ばかりなので断るつもりだっ たが、同窓会事務局より「今回の受賞 者には酒井さんより若い方がいます よ」とお話があり、「今後の決意表明 のために」受賞されることにしたとの ことであった。ICU卒業後は邦銀と外 資系金融機関にお勤めになられ、32 歳で東京農業大学に入り直し発酵技術 について勉強された。その後、未活用 資源のない世界を目指して、休耕田で 作ったお米からエタノール作りをスタ ートし、循環型社会の構築を目指すフ アーメンステーション社を立ち上げら れた。酒井さんがICUに入学された理 由は、高校時代に雑誌でICUの芝生の

キャンパスと素敵な男女の学生を見て、おしゃれな女子学生の生活に憧れてとのことであったと面白可笑しくお話になられた。ところがICUに入学すると現実は全く違ったものとなり、皆が使命と課題を持って入学していることに驚きながらも影響を受けたとのこと。最後に、これからも社会課題を解決することを使命として頑張って行きたいと述べられた。

ラストは松崎英吾さん(47 ID 03 社会科学科卒:特定非営利活動法人日 本ブラインドサッカー協会専務理事兼 事務局長/国際視覚障がい者スポーツ 連盟理事)からスピーチがあった。松 崎さんは一般企業での業務の傍ら、目 の不自由な方が"カシャ・カシャ"す る小さな音を聴いてボールをパスし合

うブラインドサッカーのお手伝いを続 けていたが、「ブラインドサッカーを 通じて社会を変えたい」との思いで協 会の事務局長に就任された。松崎さん は子どもの頃、身体が小さく、小学校 6年間はずっとクラスで最も身長が低 い生徒で、障がい者学級の生徒と時 折手を繋ぐことがあったという。当時 はその度に「いやだな」と思い、障が い者に対して偏見をもっていたとのこ と。しかし、今はブラインドサッカー が「スポーツ」を超えて公平や平和と 向き合う取り組みであるとの実感があ り、ブラインドサッカーをもっと広め て、世の中から障がい者への偏見を無 くすことを目指し、「小さくて浅い井 戸を深く掘り進め、深く掘った水脈の 普遍性に向き合い」期待に応えられる

よう頑張って行きたいと抱負を語られた。

受賞者のスピーチの後は、新しい試みとしてトークセッションを行った。事前に受賞者の皆さんに質問をお送りさせて頂いた中から、①今までの人生で最も苦しかったこと、②これからの人生の目標について受賞者の皆さんにそれぞれ語って頂いた。最後に、受賞者を代表して鈴木克明さんが「ICUはいろいろな可能性を産む種であり、お会いした方から『私、ICUです』と言われると大変感激するので、これからもそういう出会いを大切にして行きたい」と述べられ、司会の竹川さんの絶妙なタイムコントロールのうちに終了となった。

DAY賞受賞者エッセイ

2021年のDAY賞を受賞した5人のエッセイをお届けします。

翻訳:鈴木律(本誌) 写真:本人提供



鈴木克明氏(25 ID81 教育学科卒) SUZUKI, Katsuaki (CLA25, ID81, Education)

卒業後、ロータリー財団奨学金を受けてフロリダ州立大学大学院教育学研究科に留学。1987年5月Ph.D. (教授システム学)。東北学院大学助教授、岩手県立大学教授などを経て、2006年4月より熊本大学大学院教授システム学専攻長・教授としてeラーニング専門家育成を目的としたインターネット型大学院の設立に携わる。現在、同大学教授システム学研究センター長、ibstpi®フェロー、日本教育工学会会長(2017-2021)、日本イーラーニングコンソシアム名誉会員など。主著に『研修設計マニュアル』(北大路書房)などがある。

After graduating from ICU, Katsuaki Suzuki studied at Florida State University Graduate School of Education with a Rotary Foundation scholarship and acquired Ph.D. in Instructional Systems in May 1987. After working as an assistant professor at Tohoku Gakuin University and a professor at Iwate Prefectural University, he has been involved in the establishment of an internet-based graduate school for training e-learning specialists since April 2006 as Chair and a professor at Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University. Currently, he is Director of the university's Research Center for Instructional Systems, an ibstpi® fellow, President of the Japan Society for Educational Technology (2017-2021), and an honorary member of the Japan E-Learning Consortium. His major publications include Training Design Manual (published by Kitaoji Shobo).

DAY賞の受賞、身に余る光栄にとても喜んでいます。推薦してくださった方がどこかにいらっしゃるということですね、どうもありがとうございました。同窓会賞を頂戴するのはこれが

2度目ですが、1回目は学位取得後も 交流が続いていた留学先の教授たちが 推薦しての受賞という「経路」が明確 でした。しかし、この度は誰にお礼を 申し上げてよいやら、困惑しています。 受賞は不意打ちでしたが、コロナ禍で オンライン教育に注目が集まったタイ ミスクが功を奏したのかもしれない、 と思うと、この病魔の犠牲になられた 方々、後遺症に苦しんでいる方々、そ してエッセンシャルワーカーの方々に 向ける顔がありません。ただただ、自 由に外出・交流ができ、海外渡航がで きる日が一日も早く来るように祈るば かりです。

日本の大学は緩すぎるから、留学し なさい。学校の教師をしていた父にそ う諭されて、しかし留学ができなくて、 日本にあるが日本の大学らしくない大 学の受験に成功し、ICUにお世話にな りました。教職課程を履修する中で出 会ったGraded Direct Methodに魅 せられ中学校の英語教師を目指し、周 囲に多かった英語が堪能な人たちに刺 激を受け、これからでも留学したいと いう夢をかなえてくれたロータリー財 団の奨学金のおかげで、米国に学びま した。留学先の希望はロータリー奨学 生に不人気なフロリダ州という幸運も あって、最も学びたかった故口バー ト・ガニェが教鞭をとっていたプログ ラムに行けることになりました。つい 長居をしてしまい、帰国後は中学校教 諭にならずに大学で教育工学を教え、 研究する人になりました。

あれから30年が経ち、社会が大き く変わる中で、なかなか変われない大 学教育。ICUでの緩くない教育を体験 し、海外でも学び、そのあとで、新しい学部や大学、新しい専攻の立ち上げを経験し、またいくつもの国際協力プロジェクトで研修講師養成にもかかわってきました。今でも変わらない「緩すぎる日本の教育・研修を何とかしなければ」という思いの原点は、ICUにありました。「教え方」には教育工学という学問的な裏づけがあるのだから、それを一人でも多くの人に知ってもらいたい。教育の実践を少してもらいたい。教育の知見を活用してもらいためにその知見を活用してもらいためにその知見を活用してもらいたが、そんな思いを少しても具体的な形に残すように、今後もICUの同窓生であることを誇りに、精進します。

あまり頻繁ではありませんが、「私もICU卒」なんです、というたまに訪れる出会いにはいつもワクワクさせられます。そういう出会いを今後も数多く、経験できることを願っています。

この度は、どうもありがとうござい ました。

The DAY Award is more than I deserve and has made me extremely happy. Let me thank whoever nominated me. This is the second time to receive such a Distinguished Alumnus Award from an alumni association. On the previous occasion, it was clear that the professors of the overseas university that I had attended and continued to interact after graduation, had recommended me. The nomination channel was clear. However, this time I am puzzled and unsure whom to thank. I was taken by surprise, but it is true that the Covid 19 pandemic has spotlighted the importance of online learning and attracted quite a deal of attraction. Let me express my sympathies to those who have succumbed and others continuing to suffer from long-haul Covid symptoms. I would also like to thank the essential workers and pray that we be able to go out, socialize and travel abroad as soon as possible.

My father, a schoolteacher, admonished me to a foreign university because Japanese tertiary education is too lax. However, unable to go overseas. I passed the entrance exams at an un-Japanese university located in Japan and started to study at ICU. During the teacher training course, I encountered and was enchanted by the Graded Direct Method. Stimulated by the many school mates proficient in English and also my wish to become an English language teacher, I achieved my dream of studying abroad by obtaining a Rotary International scholarship. Amongst the American destinations, the state of Florida was not popular, and, lucky for me, I was able enter a program taught by the educational psychologist Robert Gagne. Having stayed a little too long in the ivory tower, rather than becoming a middle school teacher, I started researching about educational technology.

In the three decades, society has much changed, yet university education has not. Having experienced the firmed-up education of ICU, studied abroad and later involved in setting up new institutions, faculties and majors and also many international cooperation projects for teacher training, I firmly believe that the loose education and training in Japan must be transformed. The origin of that conviction lies with ICU. Pedagogy is academic discipline grounded in education technology, should be taught to practitioners and be utilized to improve the practice of education. To leave a concrete legacy of such thoughts, I will further apply myself, proud of my status as an ICU alumnus.

It is not often that someone would walk up and say to me, "I too graduated from ICU." I look forward to being thrilled by more such happy encounters.

Thank you so much for the DAY Award.

谷村格氏(31 ID87 社会科学科卒) TANIMURA, Itaru (CLA31, ID 87, SS)

1987年4月にマッキンゼー・アンド・カンパニーに入社、1999年12月に同社パートナー就任。2000年9月にエムスリー株式会社を創業し、代表取締役に就任(現任)。

After joining McKinsey & Company in 1987, Itaru Tanimura ascended to Partner to the company in December 1999, founded M3, Inc. in September 2000 as its CEO until now.

分水嶺

雨の日、窓ガラスの水滴。水滴同士 が複雑な動きをしながらガラスの表面 を落ちていく。水滴がたどり着く場所 は様々だ。

人生もそんなもので、日々の些細な事が組み合わさりたまたま今日があると感じる。「ある日偶然その友人に会った」「出発時刻間際の空港の書店で飛行機で読む本を急いで買った」「友人の送別会に行った」……それが無かったら、全く違った今日になっていると思う人生の分水嶺が数十ある。そのなかでも大きなものが幾つかある。

ICU

大学の進学先としてICUを選んだ。 実は父親もICU卒業(1期生)だが、 その影響より、根が怠惰なので環境は 少し厳しい所に身を置かないと無為に 4年を過ごしそうだと思い、「ICUは 良く勉強する環境がある」という事で 選んだ。結果的に勉強はそこまでしな かったが、野崎昭弘先生のパラドクス、 村上雅子先生のミクロ経済学、村上陽 一郎先生の科学史など今でも記憶に深 く残っている楽しい授業に刺激を受け、 発想が豊かな友人と日々触れ、ラグビ 一部で泥にまみれた。それが自分の原 型を方向付けたと感じている。

ICUではなくいわゆる「普通の大

学」に進んでいたら……全く違った今 日があるだろう。

就職:マッキンゼー

3年生の時、バカ山で寝転んで居た ら、友人に「高給のバイトがある。一 緒に受けに行こう!」と誘われ、初め て耳にしたマッキンゼー(今は多少知 名度はあるが、当時は世間的な知名度 はとても低かった)のサマーリサー チプログラムの面接を受けに行った。 「あなたのセールスポイントは?」と いう質問に「体力には自信がありま す」と的外れな回答をした。「結果は 1-2週間後にハガキでお知らせしま す」と言われたが翌日には「不合格」の ハガキが届いた(箸にも棒にも引っか からなかったのだろう)。ただ、それを きっかけにマッキンゼーの事を知り、 本選考時にはオファーを貰い就職した。 あの日、友人にバカ山で声をかけら れなければ……全く違った今日がある だろう。

起業:エムスリー

35才の時、会社を辞め起業した。 怖い面も有ったがチャレンジしてみた。 「インターネットを使い健康で楽しく 長生きする人を1人でも増やし、不必 要な医療コストを1円でも減らす」と いうビジョンを創立の日に定めたエ ムスリーという会社だ。数人で始めた が、巡り合わせもよく今はスタッフ約 8,000人、15カ国に事業展開をする 企業になった。日々、色々な国で様々 な医療課題の解決に取り組んでいる。

あの時、起業せずに会社に残っていたら……全く違った今日があるだろう。 3つの分水嶺の組み合わせは8通りあり(2の3乗)、今は8分の1の所 にたまたまいる。その組み合わせが変わっていたらどうなっていたかは分からないが、本人としてはこの組み合わせで良かったと深く感謝している。今度は自分も関わった人にとり良い分水嶺になれるよう、恩返しもしていければと思う。

Watersheds

On a wet day, rain will race down the windowpane. The droplets would intertwine and dance down the glass. There are so many places that the raindrop could end up.

Life is quite similar; today is the culmination of so many trivial happenings and daily encounters. "By chance, I met a friend the other day", "I hurriedly bought a book at the airport to read on the plane", "I attended a colleague's farewell party" – if those circumstances differed, today would not be the same. There were many dozens of turning points in my life, out of which three were the most important.

I chose ICU as the university to study in. In fact, my father was an alumnus, graduating in the first batch. More than his influence, I chose ICU because my inherent laziness might result in four years of non-achievement, unless I placed myself in a hard-working environment. Ultimately, I did not study all that diligently, but I have profound memories of the wonderful lectures that stimulated me: professor Akihiro Nozaki on paradoxes, professor Masako Murakami on microeconomics, professor Yoichiro Murakami on the history of science and others. Engaging with imaginative and creative friends or splashing in the mud with the rugby team molded the direction I would go. If I had advanced to any other university than ICU, my today would have been totally different. McKinsey & Company

In my junior year, I was lounging on the gently sloping lawn of Bakayama, when a friend asked me go along.

"There's a lucrative job offer; let's go to the interview together." This was the first time that I heard of McKinsey & Company, which was a practical unknown back then, although it is more widely recognized nowadays. In the interview for the Summer Research Program, to the question of what my strong point was, I misdirectedly answered that "I'm physically very fit!" I was told that I would be notified by mail in a week or two, but the postcard rejecting my application arrived the next day. (I was probably a hopeless case!) However, having heard of McKinsey & Company, on graduation I was offered a post and joined the organization.

If my school mate had not asked me to accompany him to the interview, my current situation would have totally changed.

M3, Inc.

At the age of 35, I quit McKinsey and challenged myself as an entrepreneur, despite the risks involved. On the day of its inauguration, the company called M3 set out its vision to increase the number of people who enjoy longer, healthier and happier lives and also minimize the unnecessary medical costs utilizing the internet. Although it started out as a small company with just a few employees, by a stroke of luck, the headcount has grown to 8000 with operations in 15 countries. M3 is daily engaged in resolving numerous health issues in many nations.

If I had not left McKinsey and started my own firm, my today would be extremely different.

Based on the three crossroads, a total of eight outcomes is possible, i.e. two cubed. By chance, I have ended up in a particular location, out of a possible eight. If the combination had differed, I cannot imagine how things would have turned out. I am deeply thankful for what it is now. Going forward, I would like to repay kindness to society by becoming a wonderful watershed to those who encounter me.



児玉治美氏(35 ID91 社会科学科卒/G1994)
KODAMA, Harumi (CLA35, ID 91 SS, MA in Public Administration 1994)

ICU卒業後、参議院議員秘書を務め、連立与党での政策決定に関わる一方、国際的な議員活動、NGO活動に参加。90年代の一連の国連地球規模問題会議にも出席する。その後、国際NGO(ジョイセフ)で、途上国での母子保健、リプロダクティブ・ヘルス、ジェンダー等の問題に取り組む。バハマで思春期保健・エイズ予防プロジェクトの実施を主導。2001年から国連人口基金ニューヨーク本部で世界の議員連盟やNGOとの協働、緊急人道支援等を担当。2008年、アジア開発銀行(ADB)マニラ本部に転職、メディア・チーム筆頭、首席企画・政策専門官などを経て、2019年、ADBでは女性初の駐日代表に就任。18年ぶりに戻った日本で、日本政府や民間、大学、NGO、メディア等との連携強化にあたる。

Harumi Kodama obtained both bachelor's and master's degrees from ICU. She served as a legislative aide to a member of the Japanese parliament before joining the Japanese Organization for International Cooperation in Family Planning (JOICFP) in 1998 working on the issues of maternal and child health, reproductive health, and gender in developing countries, and leading the implementation of the adolescent health and HIV/AIDS education in the Bahamas. Beginning in 2001, she worked at the United Nations Population Fund (UNFPA) headquarters in New York, helping to strengthen partnerships with parliamentary groups and NGOs worldwide and supporting UNF-PA's emergency humanitarian assistance. In 2008, she joined the Asian Development Bank (ADB), working at its Manila headquarters as head of the media relations team and principal planning and policy specialist. In May 2019 she took up her current post as Representative in ADB's Japanese Representative Office and returned to Japan for the first time in 18 years. She is the first female representative in the office, and is now focusing on strengthening cooperation with the Japanese government, private sector, universities, NGOs, the media, etc.

ICUに入学したのは、当時アメリカの高校に通っていて、「将来国際協力に関わる仕事がしたい」と感じていた私にとっては当然の選択でした。今でこそ帰国子女を積極的に受け入れる日本の大学は多いですが、当時は数える

ほどしかなく、その中でICUはすでに 老舗のような存在でした。

帰国子女や外国人留学生も多く、自 由な校風で、すぐに溶け込むことがで きました。一番感銘を受けたのは、一 つ一つの授業の内容の濃さと先生方の 素晴らしさでした。卒業論文の指導を してくだった最上敏樹先生には、私の 最初の就職先となった参議院議員堂本 暁子さんを紹介していただきました。 国連を退官してすぐにICUの教授にな られた功刀達朗先生には、在学中、模 擬国連の仲間達と朝まで放映のテレビ 番組に出演した際に、コメンテーター として徹夜でお付き合いいただいた他、 卒業後、先生が編者として出版された 本の一章を書かせていただいたりもし ました。その後、功刀先生が事務次長 を務められた国連人口基金に勤務する ことになったのもご縁を感じます。功 刀先生には毎年ICUのアラムナイハウ スで開かれる功刀ゼミの卒業生の集ま りに呼んでいただいたり、今日までひ

とかたならぬお世話をいただいており ます。

これらの先生方の他、憲法、特に表現の自由の権威であった故奥平康弘先生、政治学がご専門で当時からメディアでも活躍されていた姜尚中先生、国際法を教えるのに井上ひさしの『吉里吉里人』を必須の読み物として課された故横田洋三先生など、ICUで印象に残った先生や授業は数限りなく、先生方の発する一言一言を噛み締めながら聞き、授業の後には素晴らしい内容であったと、先生にお礼を申し上げることもよくありました。

学部、大学院在学中は模擬国連に没頭しました。ICUをはじめ東京の主要な大学の学生が集まる模擬国連活動のおかげで、将来国際協力の分野で働きたい、国連に勤めてみたい、という思いが強まるとともに、同じような志を持つ友人達との一生の絆ができました。また、冷戦終結後の混沌とした世界に想いを馳せ、反アパルトへイト運動を

はじめとする様々な市民運動や集会などに参加したのも、正義感溢れるICU の先生方や友人達に触発されてのことでした。

卒業後、参議院議員秘書、国際 NGO(ジョイセフ)、国連人口基金、 アジア開発銀行と、何度か転職しまし たが、一貫して変わらないのは尽きる ことのない国際協力への想いです。そ の想いを育んでくれたのが、紛れも ない我が母校、ICUです。18年間の 海外勤務の後、一昨年日本に戻り、久 しぶりに訪れたICUでのイベントに登 壇しましたが、在校生達の生き生き した表情や積極的に質問を投げかける 態度に接し、嬉しくなりました。リベ ラル・アーツを教えるICUは、専門的 知識だけでなく、幅広い教養と国際性、 そして自分で物を考え、表現する力を 養ってくれるところです。今後、また 海外に赴任することになると思います が、世界中どこに行っても各界で活躍 するICUの卒業生に巡り会えることで しょう。

ICU生を含め、若い世代の女性、男性両方を応援していますが、特に日本の若い女性には活躍してほしいと思います。私は自分のキャリアの中で、ジェンダーの平等を一つのテーマとしてきましたが、一人の女性として、この分野での進展の遅さに憤りを感じます。私自身、問題提起するだけでなく解決

策も含めて積極的に発信し続け、次世 代にとっての良いロール・モデルとな れるよう精進していきたいと考えてお ります。

この度はDAY賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。身に余る 光栄ですが、皆様のご期待を裏切るこ とがないよう、今後も途上国での貧困 の削減と持続可能な開発のために努力 していきたいと思っております。

Having graduated from high school in the United States in the 1980s, ICU was a natural choice for someone like me who wished to work in the field of international cooperation. These days, many Japanese universities are actively accepting returnees from abroad, but back then, there were not many and ICU was a long-established institution among them.

With many returnees, foreign students and a liberal school tradition, I was able to quickly blend in. What impressed me the most was the depth of educational content and the quality of professors. Dr. Toshiki Mogami provided me with guidance on my senior thesis and introduced me to Senator Akiko Domoto for my first job as a legislative assistant. Professor Tatsuro Kunuqi, who had moved to ICU immediately after retiring from the United Nations, was kind enough to join us as a commentator on an all-night TV program when I and other members of the Japan Model United Nations engaged in a live debate on the program. After graduation, I was honored to write a chapter of a book that Professor Kunugi edited. Fate would have it that I would later work at the United Nations Population Fund, where he served as Deputy Executive Director. I continue to keep in touch with him, as he hosts an annual get-together for students he taught at his seminar.

These and many other ICU professors have left a lasting impression on me. To name a few, they include the late Professor Yasuhiro Okudaira, a constitutional scholar and an authority on freedom of expression; Political Science Professor Kang Sang-jung who frequently appeared in the media even at that time; and the late Professor Yozo Yokota who used Kirikirijin, a famous novel by Hisashi Inoue, to teach international law. I savored with gusto every word uttered, and I frequently thanked them for their wonderful lectures.

During my undergraduate and graduate school days, I was immersed in the Model United Nations activities with students from ICU and other universities in and around Tokyo. Thanks to this, I felt even more strongly that I wanted to work in the field of international cooperation and at the United Nations, and I was able to build a lifetime bond with those who had similar ambitions. In the midst of the post-Cold War chaos, I reflected on global issues and participated in the anti-Apartheid movement and other citizen's movements, inspired by the teachers and classmates at ICU and their sense of justice.

After graduation, I worked as a legislative assistant to a parliamentarian, and then at the Japanese Organization

for International Cooperation in Family Planning, the United Nations Population Fund and the Asian Development Bank. Despite the job changes, my career has been underlined by my consistent and unwavering passion for international cooperation. Without doubt, this passion was nurtured by my alma mater. ICU. Two years ago. after 18 years abroad, I returned to Japan and was invited to an ICU campus event. I was overjoyed to see the lively facial expression of the students who peppered me with questions. As a liberal arts college. ICU teaches not only specialized knowledge but also nurtures an intellectual mind, an international outlook, and the ability to think for oneself and to communicate effectively. On my future overseas assignments, I am sure I will continue to meet ICU alumni who are active in various fields all over the world.

I am rooting for young people, both male and female, including ICU students. In particular, I sincerely hope that young women in Japan will have a prominent role in society. In my own career, gender equality has remained a constant theme. As a woman, I feel frustrated with the slow pace of change in this field. Thus, I will continue to actively raise issues, offer solutions and strive to become an effective role model for the next generation. I thank the Alumni Association for selecting me for the DAY Award. It is a great privilege to receive this recognition. In order to fulfill your expectations, I will make further efforts to contribute to poverty reduction and sustainable development in developing countries.



酒井里奈氏 (39 ID95 国際関係学科卒) SAKAI, Lina (CLA39, ID 95, International Relations)

ICU卒業後、邦銀に入社。その後外資系証券会社等に転職するも発酵技術に興味を持ち32歳で東京農業大学応用生物科学醸造科学科に入学。2009年卒業。翌年より岩手県奥州市の休耕田を利用した米のエタノール化事業の実証実験に参加。実証実験の結果、燃料としては採算の合わないエタノールを化粧品原料としての販売を提案し、2013年には市の研究事業から事業を引き継ぐ。現在、世の中の未利用資源を活用し、循環型社会を構築することを目指し、未利用資源から製造したエタノールを化粧品の原料として販売するほか、食品残渣や副産物の活用事業などに取り組む。2019年には経済産業省の新興企業支援プログラム『J-Startup』にも選出された。

After graduating from ICU, Lina Sakai started her career at a Japanese bank, then worked at a foreign securities company. She became interested in fermentation technology which led her to study at the Department of Fermentation Science, Faculty of Applied Biosciences, Tokyo University of Agriculture at the age of 32, and graduated in 2009. From the following year, she participated in a demonstration experiment of a rice ethanolization project using a fallow field in Oshu City, Iwate Prefecture. As a result of the experiment, she came up to the idea of selling ethanol, which was not profitable as a fuel, as a raw material for cosmetics. In 2013, she took over the business from

the city. Currently, with the aim of utilizing unused resources to build a recycle-based society, she sells ethanol produced from unused resources as a raw material for cosmetics, while working on issues of food residues and utilizing by-products. In 2019, her business was selected for the Ministry of Economy, Trade and Industry's start-up company support program "J-Startup."

DAY賞をいただくことになり、と ても誇らしく、同時にまだまだ道半ば にも関わらずこのような賞をいただき 恐縮しています。

ICUを選んだことは、私がこれまでにしてきた数々の選択の中で、最もインパクトがあるものだったと感じています。

保守的な女子校で学んでいた私が、 ICUを選んだのは、広いキャンパス、 自由な雰囲気に憧れたからでした。世 界人権宣言へ署名をして入ったキャン パスには、明確なビジョンを持った友 人、先輩や後輩が大勢いました。一方、 私はその割に勉強やサークルに打ち込 むわけでもなく、ただバカ山でのんび りしていることが多く、人生の目的に 向き合い学ぶ友人たちを眩しく感じて いました。とはいえ、ICUで、人生や 学びの楽しさを教えてくださる先生方、 友人などと共に過ごす中で、フェアで あること、個性に向き合うこと、学び の楽しさを知り、今でもICUで培った 価値観が私のベースになっていると感 じます。ICUの空気が大好きで、何を するでもなく、夕方、夜まで図書館の

キャレルで本を読み、友人と自転車に 乗って駅まで帰った日々を懐かしく思 い出します。

私は今、ファーメンステーションと いう会社を経営しています。ICU卒業 後に、金融機関などで10年間勤務(こ こでもICUの先輩、友人、後輩にお世 話になり、今でもお付き合いしている 大好きな方々が大勢います)し、発酵 技術に興味を持ち、突然思い立って東 京農大に入り直し、その縁をもとに起 業しました。ここまで来るには紆余 曲折があったのですが、思い返すと、 ICU在学時に出会った友人たちのよう に、私も自分が心から打ち込めること を探したい、と思い続けた結果、今に 至っていると感じます。金融機関を退 職して、農大に入る、といったとき、 あまりに突飛な発想に「??」という 反応がほとんどだったのですが、ICU の友人は「面白いね!いいね!頑張っ て!」と必ず言ってくれました。

ファーメンステーションは、独自の 発酵技術で世の中にあふれる未利用資源を再生し、循環型社会を構築することを目指すスタートアップです。東京と岩手に製造拠点を持ち、休耕田で栽培したお米や食品残さなどを原料にアルコールを製造、高付加価値製品にして販売する事業をしています。地域と都市の両方の視点を持ちながら、グローバル展開を目指しているのですが、 この視点はまさにICUで培ったものだと感じます。ベンチャー企業として事業の拡大を実現しつつ、社会課題の解決も同時に目指すという事業形態は、日々葛藤も多く、チャレンジの毎日ですが、同時に楽しくもあります。

正直、目指している世界の実現には程遠く、DAY賞をいただくには何も実現できていないと感じているのですが、この賞に恥かしくないよう、尊敬する大好きなICUの仲間のみなさまに対しての、私の意思表明ということで、これからも頑張りたいと思います。

I am terribly honored and at the same time rather embarrassed to be receiving the DAY Prize at this still halfway point in my life.

The choice of ICU for my education has had the greatest impact amongst any of the crossroads that I have faced.

Having studied at a conservative girls-only school, I selected ICU admiring its large campus and liberal atmosphere. On signing the Universal Declaration of Human Rights and entering the campus, I met many school mates, older and younger, with a clear vision for their future. On the other hand, I was more prone to lounging on the grassy slope of Bakayama, rather than studying hard or joining any society. I looked with envy at my friends who were contemplating the purpose of life. It was my ICU teachers and school mates who taught me the delight of education and joie de vivre; I realized that one should be fair, tolerate individuality and discovered the joy of learning. The value standards imbued in me at ICU is what I am grounded on. I loved the "air" of ICU; I have fond memories of spending my afternoons and evenings reading books in the library carrel and riding our bicycles to the station.

The company that I now run is called Fermenstation Co. Ltd. On graduation, I worked at a financial institution for ten years, during which time older and younger alumni helped me. Many are still my great friends, whom I love very much. Stirred by my interest in

fermentation technology, I suddenly decided to advance to the Tokyo University of Agriculture, whose network then propelled me to become an entrepreneur. The road was arduous with its twists and turns, but looking back, just like my ICU friends, I wanted to find something that I could devote my heart and soul. That is why I am here today. When I told people that I had resigned from the financial institution and started to study at the Tokyo University of Agriculture, many would just stare blankly at my face, who to them had made an outrageous career

move. However, my ICU friends would say "Interesting!" "Like!" or "Hang in There!"

Fermenstation is a start-up firm that deploys a unique fermentation technology to utilize the plentiful unused resources around the world and aims to create a circular society. With manufacturing plants in Tokyo and Iwate, alcohol is brewed using food waste and rice produced on once farrow fields, and sold as a high value-added product. Our objective is to make inroads overseas, endowed with a double perspective of both the periphery

and the capital center. This viewpoint was nurtured in me at ICU, I feel. This business format of expanding the scale of the venture capital company and at the same time solving social issues creates so many daily dilemmas and challenges, but at the same time it is FUN.

In all honesty, I am far from having built a universe that I had dreamt of and have achieved nothing to merit the DAY Award. However, let me pledge to my fond and venerable friends of ICU that I will continue my efforts and become one day ever more worthy of this prize.



松崎英吾氏 (47 ID03 社会科学科卒) MATSUZAKI, Eigo (CLA47, ID03, SS)

特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会 (JBFA) 専務理事兼事務局長/国際視覚障がい者スポーツ連盟 (IBSA) 理事。学生時代に偶然に出会ったブラインドサッカーに衝撃を受け、深く関わるようになる。大学卒業後は、株な会社ダイヤモンド社に勤務。一般企業での業務の傍らブラインドサッカーの手伝いを続けていたが、「ブラインドサッカーを通じて社会を変えたい」との想いで、日本視覚障害者サッカー協会(現・日本ブラインドサッカー協会)の事務局長に就任。「サッカーで混ざる」をビジョンに掲げる。サステナビリティをもった障がい者スポーツ組織を目指し、事業型非営利スポーツ組織を目指す。AERA「日本を突破する100人」(2014年)、朝日スポーツ賞(2018年) など。

Eigo Matsuzaki is Executive Director and Secretary General of Japan Blind Football Association and a board member of the International Blind Sports Federation (IBSA). During his ICU days, he had an opportunity to experience blind football which gave him a life-long impact, and has become deeply involved ever since. After his graduation, he continued to support activities as a volunteer while working for Diamond Inc. In 2007, he left his job and joined Japan Blind Football Association as full-time Secretary General raising the banner of "mingle together in football." He aims at sustainable management of a sports organization for people with disabilities, by creating a business-type non-profit sports organization. He was chosen for the AERA magazine's "100 people who break through Japan" (2014), Asahi Sports Award (2018), etc.

この度はDAY賞にお選びいただき、 誠にありがとうございます。

在学中、学業に力を入れていたとは 必ずしも言えない私にとって、ICU同 窓会から素晴らしい賞をいただくこと が、恐縮でもあり、また、面映ゆくも あります。

当時は、好奇心の赴くまま、さまざまなことに「とりあえずチャレンジする」学生でした。バックパックの旅、様々なアルバイト、ワークキャンプ、ボランティア、インターンetc.。

これらの活動によって大学に行かない時期があっただけでなく、これらは恥ずかしいほど長続きはせず、さまざまなものをかじって味見をしては目移りする日々だったように思います。恩師である石生義人先生には、しばしば

多大なご心配をおかけしたことを、今 でもよく覚えております。

いま、私は、ブラインドサッカーという障がい者スポーツに携わっています。実はこれも、そんな好奇心の旅のなかで出会いました。飛び込んでみたインターンシップ先で情報を知り、なんだかよくわからないまま見に行った程度のきっかけでした。それがいまや、社会人歴で、もっとも長い仕事となっています。

ブラインドサッカーと聞くと「視覚障がい者のスポーツですね」「パラリンピックの種目ですね」と、近年その存在は知られるようになってきました。パン屋さんがパンを扱うように、私の仕事はブラインドサッカーというスポーツを扱います。スポーツを普及したり、試合機会を提供したりと、「スポーツの仕事」と言えるでしょう。

他方で、このブラインドサッカーという小さく浅かった井戸を掘ってきた私は、そこで、障害とは? 視覚とは? 経営とは? 非営利組織とは? と考えさせられる機会が多々ありました。それは、表面上の「スポーツの仕事」だけでは、うまくいかないことが多かったからです。

そこを更に掘り進めていくと、公正 とは? 平和とは?と、さらに抽象的で、 普遍性ある問いに至ります。「小さく て浅い井戸でも、深く掘り進めれば普 遍的な水脈にたどり着く」のだ、と今、 感じています。

この水脈に至る思考や視点こそが、 私が学業と学外活動のなか、ICUで学 んだことではないかと思うのです。教 室だけでなく、学食、そしてバカ山で、 青臭くまっすぐに友人と対話し、思考 を深くしようとする経験ができたICU の学風にこそ、私は知らぬ間に鍛えら れていたのです。

いま、ブラインドサッカーが「スポーツの仕事」を超えて、公正や平和と向き合う取り組みである実感が私にはあります。それこそが、ICUに通った成果であり、本賞受賞の評価と信じるところです。

末筆に、「顕彰は時代の空気がつくる」とも感じます。このような賞を、人生半ばにも至らぬ私が受賞できた理由は、実績より期待であることでしょう。オリンピック・パラリンピッ

ク「ブーム」の渦中にある業界ですが、これを一時的なこととして捉えることなく、深く掘った井戸の水脈の普遍性に向き合うことで、ご期待に応えるべく、これからも感謝を持って努めて参ります。

Let me express my gratitude for choosing me for the DAY Award.

I feel rather shameful that the ICU Alumni Association has given me this wonderful honor, despite my past record of not exerting myself in my studies

Back at university, I was a young man who would try and challenge at anything that fueled my curiosity: backpacking, all sorts of odd jobs, work camps, volunteering, internships, etc. These activities, which were often embarrassingly short-lived, sometimes prevented me from going to classes. I would sample everything that interested me, bite on it and then move on. I remember vividly how my supervisor, professor Yoshito Ishio worried sick for me.

Currently, I am involved in Blind Football, a sport for the handicapped, which again my curiosity had led me to encounter. At the company that I had jumped into as an intern, I heard about blind football and went to join a training session. Although not quite knowing its ins and outs, this has become my longest serving job in my adult life.

When people hear about blind football, they would recognize it as a sport for the visually impaired or in recent years that it is a Paralympic event. Just as a baker bakes the best bread, I handle the sports of blind soccer. It is the business of sports to popularize this particular event and provide opportu-

nities for matches with other teams.

On the other hand, I had scratched out a very small and shallow well called blind football, but once down inside I faced so many thought-provoking issues: what is disability? vision? management? a non-profit organization? The superficial perspective of the "business of sports" is insufficient in many instances.

On further delving into these questions, I would face more abstract and universal issues: what is justice? peace? This small and shallow well, when dug deeper, reaches the aquifer of universality.

That train of thought and perspective that permeates these universal values are what I learned through the scholarship and extramural activities at ICU. Not only in the classrooms, but at the university cafe or on the gently sloping lawn of Bakayama, I was trained to think more deeply through the frank and naive conversation with friends. Without realizing, I was forged by this experience of ICU's academic tradition.

Blind football has transcended its bounds as a sports business and has become an endeavor to face such issues as justice or peace. This is the outcome of having studied at ICU and I believe also why this prize is being accorded me.

Lastly, I do feel that the wind of the times has brought me this celebration. The reason that this award was given to me, wet behind the ears and even before the halftime of life, was not my track record, but rather hope for the future. In this vortex of the Olympic and Paralympic Games, which should not be looked upon as ephemeral events, I would like to wade into the aquifer of universality, respond to your expectations and keep up the efforts, with deep gratitude in my heart.



74_People 山本慎一 (31 ID87

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

山本慎一さんは社会科学科を卒業後、 岩波書店に入社。営業部や岩波新書編 集部などを経て、中高生向けの岩波ジュニア新書編集部へ配属され、2010 年から編集長を務める。ICUで学んだ 「新しい世界へ飛び込む面白さ」を原 動力に新書の編集に長年携わり、今年 3月には「岩波ジュニアスタートブック ス」の創刊にも携わった。

文:滝沢貴大(本誌)

山本さんがICUへの進学を決めたのは、当時人類学をしっかり学べる数少ない大学だったから。高校時代から学者の梅棹忠夫さんや山口昌男さんの本や、アフリカや南米の調査記録をまとめた本などを愛読していて、異文化への憧れと人類学への興味を抱いていた。

ICUへ進学すると、志望通り人類学 を専攻した。アドバイザーは文化人類 学者の青柳清孝さんで、卒論ではオー ストラリアの先住民族・アボリジニー のエスニックアイデンティティーの確 立について書いた。印象に残っている のは、人類学調査実習の授業で、10 人ほどの学生と引率の教授とで2週間、 沖縄・宮古島にフィールド調査へ行っ たこと。調査のテーマは「宮古島・上 野村の青年会活動と島起こし」。「サト ウキビを刈るのを手伝ったり、一緒に 泡盛を飲んだり、日常生活を一緒にし ながら話を聞き、それを学問につなげ るのがすごく楽しかった」と振り返る。 「本を読むだけじゃなくて、現場に行 って生の人の声を聞く大切さも実感し た」

課外活動では、サイクリング部と陸上部に所属したほか、劇作家の平田オリザさんが旗揚げした劇団・青年団の初期に参加して、役者として「時代の波に飲み込まれる殿様」などを演じた。「それまで演劇なんてしたことはなかったが、新しい世界に触れる面白さを感じた。本も新しい世界に触れる入り口だと思うので、今の仕事に通じるものもある」

一番難しいのは 著者とのやりとり

当初は人類学者になりたかったというが、学生時代の経験を通して、研究者としてより、もっと一般向けに、色々な人たちの魅力とか活動を伝える仕事をしたいと思うようになったという。就活でマスコミ業界を志望したが、とくに新聞やテレビよりもじっくりと物事を伝えられる本に魅力を改めて感じ、出版者を志望。新卒で岩波書店へ入社した。

採用面接のときから、研究書や学術



YAMAMOTO, Shinichi

1963年、千葉県市原市生まれ。社会科学科を1987年に卒業し、岩波書店へ入社。10年前から岩波ジュニア新書の編集長を務める。社会人になってから鍼灸師の資格を得て、1年間南米へボランティアに行き、医

療体制が乏しい地域で鍼灸治療を施したこともあるという。

書よりも一般の人が広く読める本の編 集に携わりたいと伝えていた。願いが かない、岩波新書編集部に配属される。 それ以来、新書編集畑を歩んできた。

「小説の編集と新書やノンフィクションの編集では、仕事の内容はだいぶ違う」という。前者は作家ありきだが、後者はテーマを先に決め、そこからふさわしい書き手を探すことが多いという。山本さんは「『今の社会、読者にどんな本が必要なのか』というところから考えてテーマを決め、書き手を探し、それを伝えるにはどういう内容がいいのか詰めていく流れ」。最近だと、ICUの 西村幹子教授の『SDGs時代の国際協力:アジアで共に学校をつくる』という新書の出版に携わったという。

「一番難しいのは著者とのやりとり。 著者と何度もコミュニケーションを重ねて、お互いが納得するまでやりとり して本を仕上げる。書き手の持っている一番良いものを引き出すお手伝いを する感じです」

新レーベル立ち上げも

現在編集長を務めている岩波ジュニア新書は、1979年創刊。当時は格差が広がり、校内暴力やいじめの問題が特に深刻だった時期で、「学校だけじゃなく、もっと違うところでの学びを若い人に与えたい」といった思いで創刊されたという。

中高生向けだが、忙しい社会人に

も向いていると山本さんは指摘する。 「中高生向けだけど、決してレベルを 下げるわけではなく、中身は一流のま ま伝え方を易しくすることに気を遣っ ている|

編集長になってからは、編集の仕事もこなしつつ、他の人の仕事のサポートをしたり、レーベル全体の方向性を決めたりしている。懸案事項は、若者の読書離れ。「ネットでは、短い情報を得ることはできるが、論理的に語られた思い、考えを読んで自分自身が考えることは難しい。その上で、本は良い媒体、これからの時代にますます必要だと思う」

今年3月には、新レーベル「岩波ジュニアスタートブックス」の立ち上

げに参加した。岩波ジュニア新書より、さらに読みやすくし、色々なものに興味を持ち出す中学生くらいの読者に学びのきっかけを作るべく創刊した。「中学生の時期に興味持ったことって、その人の人生を決める、将来の道のスタートになるかもしれない。色々なテーマを紹介することで、誰かが一歩踏み出すきかっけになればいい」

そうした中で、特に最近意識していることがある。「昔は大人が子どもに教え諭すような書き方が多かったが、今は価値観が多様化しているし、正解のない時代。何が正しいかはみんなで考えないといけない。書き手の意見を押し付けるのではなく、読者が考えるきっかけになる本を作っていきたい」



文理融合を目指す新館(仮称)建設の報告

~起工式に隈研吾氏を迎えて~

文:中嶋隆(ICU財務担当常務理事)・新井亭一(ICU基金担当理事兼学長特別補

去る5月21日(金曜日)、工事の安全を祈念する、新館(仮称)の起工式が建設予定地で執り行われました。設計を担当した隈研吾氏をはじめとした建設関係者及び理事長以下の学内関係者が参加しました。これから、来年末の完成に向けて工事が本格化します。この機会に厳しい財政状況の中、新館建設に踏み切った背景を説明します。

理学館が完成したのは1967年です。 構造躯体は、まだまだ丈夫で本館同様 にこれからも長期の使用に耐えうるも のですが、内装設備は経年劣化が激し く、大規模修繕工事が必要になってい ました。大規模修繕工事は、その建物 内の設備や機能を他の建物に一時的に 移転して行うのが一般的です。現在進 められているD館東棟の大規模修繕で も、事務室を仮移転するなどして建物 を完全に閉鎖して工事を行っています。 しかしながら、規模が大きい理学館の 場合、修繕工事中にその機能及び設備 を移転できる建物はキャンパス内には ありません。また、仮設校舎を建設し、



そこに一時的に機能と設備を移転するという案も検討しました。しかし、電子顕微鏡などの機材は、移設時に精密な調整が必要で多額の費用も発生し、仮設校舎建設の場合は、それを2回繰り返すことになります。さらに、仮校舎とは言え、実験機材の設置や授業ための防音に配慮した建物にする必要か

ら費用もかかり、大量の廃棄物発生という問題があり、これも断念しました。 学生数が増え教室・研究室等の不足も あり、結局、新たに校舎を建設することになりました。

新館の建設が完了すると、次は、理 学館の改修、その後本館の改修と続き、 今後も施設整備を所管する財務理事は、 高水準な仕事量が続きます。そこで、これまで財務理事を兼任していた新井は基金担当理事専任となり、新たに中嶋が専任の財務担当常務理事として万全の体制で施設整備プロジェクトに臨むことになりました。今後とも同窓生の皆さんの変わらぬご支援をお願いします。

コロナ禍の「ゆるキャリ」via Zoom開催報告 ~気軽に参加、先輩たちの「本音」を聞ける、ゆる~い感じのキャリア相談会~

文:廣岡敏行(31 ID87 同窓会学生部担当副会長代行)

学生向けの恒例就職相談イベントである「キャリア相談会」が、コロナ禍で「ゆるキャリ」という名称とZoomによるオンラインに形を変えて、今年3月より毎月第3土曜日に開催中です。同窓会学生部では、毎年同窓生による学生向けイベントを開催していましたが、新型コロナウイルスで物理的イベントの開催に目処が立たず、今年からZoom方式に変更し毎月開催として運営しています。3月に正式スタートした「ゆるキャリ」は、1回あたりの登壇同窓生を司会含めて4人程に限定し、約20人から40人ほどの学生が参加しています。

相談会の目的は今までと同じく、就職をテーマに社会人経験豊富な同窓生に相談する場の提供としていますが、内容、運営、開催形式などは学生のニーズに合わせて様々な工夫をしています。例えば、学生がより気軽によりざっくばらんな同窓生の話を聞けるように、また可能な限り学生の聞きたい内容が中心となるよう、事前に学生からの質問を受け付けたり、同窓生が事前質問に沿って話すなどの工夫をして

安藤公秀

2018年、バキスタンから
の国籍民間人へ叙動する最高勲等。
「バキスタン歴代首相と交友関係。これは規模相 Iman Khan E を 意見強しているところ。
東 も ICU卒業生(ID 83、セプテンパー)

前首相 Shahid Khaqan Abbasi氏
とは頼文

27. THirosia Buskud

27. THirosia Buskud

います。内容も、就職テクニックというより、就職前、就職時と就職後の同窓生の考え方や生き方の話を中心としています。同窓生の人選も綿密に行い、可能な限り卒業年次、業界、転職経験者、外資・内資から生き方までを考慮し、偏りを避けバランスを図るようにしています。さらには、イベントの進

行もゆる~い感じで学生も同窓生も参加できる進め方とし、イベント名もその気軽さを表す為に「ゆるキャリ」としています。

この「ゆるキャリ」は、今年いっぱい毎月第3土曜に開催を予定し、コロナによって劇的に変わってしまった就職を取り巻く環境下において、継続

的に少しでも学生たちをサポートしていく予定です。尚、「ゆるい」と言いつつもイベントの企画と準備にはかなりの時間と労力を必要とします。特に「ゆるキャリ」の企画・実施に携わっているイベントリーダーのICU常任理事の新井さん(31 ID88)や、同窓会学生部の皆さんには心より感謝致します。

学内住宅の記録と記憶をめぐって ~シンポジウム開催報告~

文:岸佑(47 ID03/G2005 · 2008)

今年2月に、「ICU教員住宅の歴史 的環境を考える」というオンライン シンポジウムを行った。シンポジウ ムは二部で構成され、前半が「ICU教 員住宅の特徴を読み取る」と題して、 2018年秋から2年ほどかけて行った 学内住宅の調査・研究成果が発表され た。後半は「ICU教員住宅の保存・活 用をめぐって」と題し、2019年前期 に東京理科大学工学部建築学科で行わ れた設計演習スタジオ(授業担当:木 内俊彦)の成果が披露された。演習課 題は、アントニン・レーモンド設計の 学内住宅をリノベーションするという もので、コメンテーターとして担当教 員である木内氏と、当時の居住者であ った数学の鈴木寛本学名誉教授をお迎 えした。およそ3時間半に及ぶシンポ ジウムだったが、ICUの学生、教職員、 同窓生をはじめ、建築関係者などおよ そ160人が集まり、質疑応答では住宅 の保存と活用をめぐって活発な議論が 展開された。

ICU構内に現存する住宅群の多くは、 2人の外国人建築家W. M. ヴォーリ ズとアントニン・レーモンドの事務所 が開学初期にデザインを手掛け、日本 近現代建築史上でも高い歴史的価値を 有するとともに、今なお現役の住宅と して活躍する稀有な建築群である。こ れらは、居住のための住宅としてだけ ではなく、学生や教員の交流の場とし て多くの人が集う空間でもあり、ICU を体現する建築のひとつでもあった。

住宅の一部はキャンパス再開発のた めに空き家となっており、2018年か ら東京理科大学工学部建築学科伊藤裕 久研究室とICUアジア文化研究所の有 志で研究会を結成し、ICUから許可を 得て空き家の建築調査を行った。研 究会発足のきっかけは、大和田卓氏 (ICUHS 27期、理科大卒/現在、日



建設計)が学内に住われていた鈴木教 授宅での「聖書の会」に参加し、学内 住宅の「集う場」としての使われ方に、 感銘を受けたことである。「ハケ」と 呼ばれる国分寺崖線沿いの歴史的居住 環境の形成過程を調査していた伊藤研 究室に大和田氏が相談し、さらに伊藤 研究室の石榑督和助教(当時) と筆者 が偶然にも旧知だったことから、筆者 に問い合わせがきた。調査をはじめて まず驚いたことは、ICU構内の住宅群 の歴史的変遷や建築的特徴などの実態 があまり知られてこなかった、という 事実である。そこで今回調査を行うに あたり、住宅の実測や、大学に残る住 宅の図面資料等の情報整理を行い、そ

学内住宅の「これまで」を知り 「これから」を考えたい

れぞれの住宅の配置と形態的分析や

「ハケ」の近代史に至る研究を行った。

調査を行うにつれ二つの問いが浮か び上がった。ひとつは国分寺崖線と学 内住宅との関係である。国分寺・小金 井エリアには、戦前から「ハケ」沿い に多くの別荘や邸宅が建てられた。泰 山荘や中島飛行機三鷹研究所も「ハ ケ」の高低差を利用している。さらに 遡れば、縄文時代の住居跡も数多く見 つかっている。では、ICUキャンパス 以前の歴史的環境は学内住宅の立地に どう影響しているのか。

もうひとつの問いは、ヴォーリズと レーモンドの住宅の共通点である。言 い換えれば、なぜ学内住宅は多くの学 生を惹きつける建物であるのか。それ ぞれ異なるポリシーに基づきデザイン された住宅ゆえ、相違点を見出すこと はそれほど難しくない。しかし調べて みると、両者とも和風住宅の歴史的ス ケール感が継承され、住まいの機能 としてつくられた洋風リビングとは異 なる特徴を持っていることがわかった。 そこに学内住宅がもたらす場と空間の 魅力を読み解く鍵があるのではないか。 しかし、実測や図面資料による調査に は限界があった。それは、建物の使わ れ方がわからない、という点である。 研究会としては、今後、生活の記録を 含めて調査を継続したいと考えている。

シンポジウム後半の話題は、これら 学内住宅の保存と活用についてである。 理科大生と大和田氏の提案によるリノ ベーション案は、地域に開いたビジタ ーセンターとするもの、あるいは構内 樹木を加工する木工所とするものなど、 ICUキャンパスの特徴を捉えた示唆に 富むものであった。また比較事例とし て紹介された山梨英和学院旧宣教師館 についても、その調査結果と活用計画 の提案は参考すべきものだった。

ICU構内の住宅は、学生や教員の交 流の場としてコミュニティの形成に大 きく貢献してきた。時代とともにその 役割の大きさは変容したが、今なおそ の重要性は失われていない。築後50 年を過ぎた学内住宅は、ヴォーリズや レーモンドといった建築家のネームバ リューも加味されて、「古民家」ある いは「文化財」としての新たな価値を 生みつつある。同時に学内住宅から は、過去のある時点における「明日の 大学」の理想を窺い知ることができる。 それは、後続世代へ継承すべき物質的 記憶である。建築家のネームバリュー にとどまらない、大学の記憶と記録を めぐる次世代への継承の課題を学内住 宅は我々に示してくれている。

あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

三井住友信託銀行の遺言信託では、皆さまの財産に関するご意思を正確に反映する遺言書作成 のご相談や、遺言書の保管*・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。

まずは財務コンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託(執行コース)手数料等について(消費税等込み)】(2021年6月1日現在)

《お申込時》基本手数料:330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本など取り寄せに関する費用等が必要になります。

〈遺言書保管中〉遺言書保管料:毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬:当社所定の報酬を申し受けます。(最低報酬額:1,100,000円) 上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。

○国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。

この制度により遺贈をされる場合は基本手数料が5万円割引となります。ご相談の際にお申し出ください。

0120-181-536

受付時間

平日9:00~17:00(十・日・祝日および 12/31~1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託



その人を信じて、その人に託す。 *Meel* The Trust Bank

From the University

大学のページ

当ページは、ICU歴史資料室が連載を担当しています。

皆さまが在学されていた当時の歴史やこれまで知らなかったICUについて知る機会にもなるかと存じますので、ぜひご一読ください。

ICU Archives provides a series of articles for this section from the last issue.

We hope these stories will give you an opportunity to learn about the history of ICU,
looking back on those times when you studied here and discovering facts which you were not aware of till now.

文・松山龍彦 (ICUアーカイブス) Text: Tatsuhiko Matsuyama (ICU Archives)







宮澤吉春

図書館正面の石碑

園丁 宮澤吉春

石に刻まれた男

大学図書館の正面に向かって左側の スロープ下に生えているアカマツ。そ の根元にある石碑を覚えていらっしゃ る方は少ないでしょう。現在の学生・ 教職員でもこの「平和記念 1952」と 彫られた小さな石の存在を知らない人 がほとんどです。サンフランシスコ講 和条約によって太平洋戦争が正式に終 結し、日本国の主権が回復したのを 記念して植樹および除幕されたもの で、裏側には植樹に関わった人物の名 前が刻まれています。秩父宮雍仁(や すひと) 親王妃勢津子様、東ヶ崎潔初 代ICU理事長、湯浅八郎初代ICU学長、 そして「園丁 宮沢吉春」。 宮澤さんは 大学創立期からの職員で、キャンパス 内の樹木の剪定や移植を担当していま した。なぜ宮澤さんの名前がここに刻 まれているのでしょうか?

記録によれば宮澤さんは1901(明治34)年、20世紀が始まって数ヶ月のちに三人兄弟の末っ子として現長野県小県郡青木村に生まれました。上田から長野方面へ抜ける律令時代の七道の一つ「東山道」が村内を通っていたため、この地方には都の情報がいち早く伝わっていました。正義と反骨に富んだ精神は「青木村気質」と言われ、この村から起こった百姓一揆は江戸時

代から明治時代にかけて全国最多の5回を数えています。いわく「夕立と騒動は青木村から来る」。上田に近い里山の村人の間で語られるそんな気骨が、宮澤さんの一生を貫いていきます。

戦争とキャリア

宮澤さんは19歳の時、海軍に入団 志願し舞鶴海兵団に入っています。こ のころから品行方正で人々から信頼さ れる人徳があったのでしょう。翌年、 大正10年には20歳という若さで、皇 太子(のちの昭和天皇) 欧州巡啓の旗 艦「鹿島」の乗組員(第5分隊海軍二 等水兵) として半年間の航海を体験 しています。ICU元職員の細木盛枝さ んによれば宮澤さんは「航海中、イン ド洋で暴風雨により他2船員とともに 甲板より落水したが、唯一救助され生 還した」とのことですが、『皇太子殿 下御外遊記』には岡田という二等水兵 が落水遭難した件しか触れられておら ず、真偽は確かめられていません。ま た、帰国時にイギリスに残って英語を 勉強してはどうかとの上官の奨めを断 ったとの逸話から宮澤さんの人柄が察 せられます。

帰国後の大正11年、当時東洋一の 航空基地と言われた霞ヶ浦海軍航空基 地の航空隊に奉職します。航空隊員だ ったかどうかは定かではありませんが、

もしそうだとすると年に30名程度の 入隊生の一人としてエリート扱いだっ たことになります。先の細木盛枝さん によれば当時の航空隊副長(のちの連 合艦隊司令長官)山本五十六の従卒に もなったとのこと。4年後の大正15 年(昭和元年)には退籍していますが、 この航空隊時代にのちのICUとの接点 が生まれた可能性があります。という のは、今の土浦にあたるこのあたりに、 航空機メーカーの先駆的存在である中 島飛行機が若栗工場を持っており、同 社が量産メーカーとして飛躍し始めた 時期にあたるのです。社長の中島知久 平との接点がここにあったと考えても おかしくありません。ご存知のように ICUは中島飛行機三鷹研究所の敷地跡 に誕生するのです。

海軍を去った宮澤さんは群馬県警察署に勤務します。伊勢崎市、太田市、前橋市と転籍しましたが、これらの町にはいずれも中島飛行機の工場がありました。そして昭和13年11月、(細木さんの記事によれば航空隊時代の上官の推薦で)中島飛行機株式会社に入社し中島知久平の警護係として東京都市ヶ谷と麹町で勤務したのち、園丁として名を残す三鷹市上石原2153番地(泰山荘)に転居し、警護および山林土地管理業務に従事。中島知久平の三鷹での世話係になるのです。

昭和24(1949) 年、10月29日、中 島知久平は住んでいた泰山荘の母屋で、 脳溢血で亡くなります。終戦後、A級 戦犯に指定されながら病気を理由に蟄 居し続けた末のことでした。この時点 で、中島飛行機三鷹研究所の用地はす でにICUに払い下げされることが決ま っており、大学創立関係者による視察 も行われていました。大学が、この土 地のことを隅々まで熟知している宮 澤さんにコンタクトしないはずがあ りません。アーカイブズには昭和25 (1950) 年5月5日付けの宮澤さんの 履歴書が残っています。同年6月1日 付けで中島飛行機を退職しICUに入職。 以降、1975年に病没するまでの25年 にわたってキャンパスの植栽管理を担 当しました。

寡黙な聖人

宮澤さんの実直な性格は当時の教職員に良く知られていました。毎日必ず5時に(時計がなくとも)起床。夏は5時に芝刈りを始め、涼しいうちに大半の仕事を終えてしまう。肉や魚が嫌いで、一切食べない。構内の空き地を耕して自分で大根、ホウレン草、ネギなどを作って食べる。華やかな経歴とは対極の謙虚さを持っていたらしく、過去の大学文書を探しても本人が書いた文章や記事・写真など一切残してい

ない。明治生まれの一本芯の通った気骨のある人物。どこまでもストイックに献身的に働き、誰の賞賛も期待せず、脚光を浴びる舞台には決して登らない。このいじらしいまでの謙虚さを思う時、ICUの歴史の中にもう一人思い当たる人物がいます。それは初代総長(学長)湯浅八郎です。武田(長)清子名誉教授による『湯浅八郎と二十世紀』は、湯浅の人となりを知る上で貴重な著作ですが、これを読めば読むほど、独立した人格の持ち主で神以外の何かに仕えることをよしとしない人だったことが分かります。同著では「湯浅はローナー(loner)」だったという

元同志社宣教師オーティス・ケーリの言葉を引用しています。「ロンリー (lonely)」即ち寂しいというのではなくて、一人でいても寂しくない人であると。そして顕彰や功名は敢えて避けていたように受け取られます。そんな湯浅にとって語らず奢らず黙々と日々の労働で人生を全うしようとする宮澤はリスペクトの的だったのです。湯浅八郎が古希記念に配布した文章「ICU私見」からの文章を抜粋して筆を擱きます。

「私が如何なる心構えで人間尊重の根源的主張を実践しようとしたかは、私がICUに残した唯一の石碑がこれを

物語るかと思います。それは1952年、新しい国際政治の転機となった日米平和条約締結を記念し、当時のICU責任者として名誉評議員秩父宮妃殿下、理事長東ヶ崎潔博士、評議員会議長鵜沢総明博士、総長私とが一本の松を校庭に移植しましたが(図書館正面に現存)、その下に建てた記念碑です。その碑にはもう一人の名前が刻まれていますが、それは園丁、宮沢吉春氏です。宮沢さんはICU創立当初から長逝されるまで、一日も休まず、四十万坪の校庭にある一木一草を愛護して自主的に終生誠実一途に献身奉仕された模範的人間であられました。総長としての私など、そ

の点宮沢さんの靴の紐を解くにも価いしない者でしょう。宮沢さんこそICUが念願する人間育成の模範です。ですからこの記念碑を建てる時、万一石面の都合か何かで名前を省く必要とせ、落とせ、落とせ、落とは窓場合には総長湯浅を第一には宮沢さんを発せ、そうして字の大きさや字格は全部同じにするように注文したが、日本の何処の大学でこのような実例がありるでしょうか、これはICUが世俗の慣習にとらわれず、地位や肩書に煩わされず、人間を人間として尊重している実例の一つです。」

Gardener Yoshiharu Miyazawa

A Man in a Stone

There's a red pine tree at the foot of the slope to the ICU Library entrance. Not many people are aware of the small stone monument situated at the base of the tree. Only few, even among the current students, faculty, and staff members, know about this stone inscribed "Peace Memorial 1952." The pine was planted and the monument was erected in commemoration of the signing of the San Francisco Peace Treaty, which officially ended the Second World War and the Allied Occupation of Japan. The names of the persons involved in planting the pine tree were inscribed on the back of the stone: Princess Chichibu (Yasuhito Shinno-hi Setsuko); Dr. Kiyoshi Togasaki, the first Chairperson of ICU Board of Trustees; Dr. Hachiro Yuasa, the first President of ICU; and gardener Yoshiharu Miyazawa. Mr. Miyazawa served as a gardener and took charge of pruning and transplanting of the trees on the university campus since its founding. Why is his name inscribed on this stone monument?

According to the records, Miyazawa (honorific omitted) was born in Aoki Village of Chiisagata District, now a part of Nagano Prefecture, as the youngest child of three brothers in 1901, a few months after the beginning of the twentieth century. Tosando, one of the seven main roads built between the sixth and seventh century ran through the village from Ueda to Nagano, which gave the villagers fast access to news from the capital. The village was known for its righteous and rebellious spirit called the "Aoki spirit." The number of peasant riots that started from this village during the Edo and Meiji periods counted five, the largest number among all villages in Japan. People used to say, "storms and turmoil come from Aoki Village." It was this uncompromising spirit and backbone often talked about among the people of the village near Ueda with hills and woods that continued to guide Miyazawa's life.

Out of the War

When Miyazawa was 19, he volunteered for the Navy and joined the Maizuru Marine Corps. He must have been a well-behaved and trustworthy young man, as the following year in 1921, when he was only 20 years old, he went to sea for half a year as a crew member (2nd class seaman of the 5th squad of

the Navy) of Kashima, the flagship of the fleet that carried Crown Prince Hirohito (who later became the Showa Emperor) on his visit to Europe. According to Mr. Morie Hosoki, former ICU Property and Custodian Office Director, Miyazawa fell from the deck when the fleet was caught in a storm in the Indian Ocean. Two other seamen fell with him, but he was the only one saved from the raging waters. This story, however, cannot be verified because the account of the Crown Prince's travel abroad "Kotaishi Denka Gogaiyu-ki" only mentions that a 2nd class seaman named Okada fell overboard and was lost. When returning to Japan, his supervisor suggested that Miyazawa could stay a while in England to learn English, but he humbly declined the offer, an anecdote from which we can infer his character.

In 1922, after he returned from the voyage, he was assigned to serve for the navy air corps at the Kasumigaura Naval Air Station, which was said to be the best air station in the East at that time. We could not confirm whether he was a member as a pilot, but if he was, that would mean he was a member of an elite group for which around 30 members were selected each year. According to Mr. Hosoki, he served as an orderly to Isoroku Yamamoto, then the Vice Chief of the Air Corps and later the Commander-in-Chief of the Combined Fleet. Four years later in 1926, Miyazawa retired from the military, but it could have been during this period of service to the air corps that he became acquainted with the person who later connected him to work for ICU. In the area now called Tsuchiura where the air station was located, a pioneering aircraft manufacturer, Nakajima Aircraft Company, was operating its Wakaguri Plant and was emerging as a mass production manufacturer. It is quite possible that Miyazawa came to know Chikuhei Nakajima, the president of the company. As you know well, ICU was founded on the former grounds of Mitaka Research Institute of the Nakajima Aircraft Company.

After leaving the Navy, Miyazawa worked for the Gunma Prefectural Police. He was stationed in Isesaki City, Ota City, then Maebashi City, and the Nakajima Aircraft Company had a factory in each of these three cities. In November 1938, he joined the Nakajima Aircraft Company (by recommendation of his supervisor at the air corps, according to an article written by Mr. Hosoki) and served as

a security guard for Chikuhei Nakajima. At first, he worked in Ichigaya and Kojimachi in Tokyo, but later moved to Taizanso (where he would leave his name as a gardener) at 2153 Kami-Ishiwara, Mitaka City where he worked as a security guard and land manager, taking care of Chikuhei Nakajima when he was staying in Mitaka.

On October 29, 1949, Chikuhei Nakajima passed away due to a cerebral anemia. He died in the main building of Taizanso where he lived. After the war, Nakajima was designated as a class-A war criminal but did not attend the summons because of his illness and had instead been confined at home. By the time of Nakajima's death, it had already been decided that the grounds of Mitaka Research Institute of the Nakajima Aircraft Company would be purchased by ICU and the founders of ICU had already visited the site. There is no doubt that the university officials contacted Miyazawa who knew so well about the land. Miyazawa's résumé dated May 5, 1950 can be found in the ICU archives. He resigned from the Nakajima Aircraft Company on June 1 and joined ICU. Ever since, he managed the vegetation on campus for a quarter of a century, until he deceased of illness in 1975.

A Quiet Saint

Miyazawa's scrupulous character was well known to the faculty and staff members of the university. He woke up at five o'clock every morning (even without a clock) and started mowing the grass at five during the summer to finish most of his work before it became hot. He didn't like meat or fish and resisted eating any. He would find empty space on the campus to grow his own food like radish, spinach, and green onions. He seems to have been a humble man regardless of his honorable career. We could not find any passages or articles he wrote nor photos of him in past university documents. The kind of person we surmise from these facts is a man with a strong and straight backbone born in the Meiji era. A monastic man committed to his work, who never expected to be praised or to attract any attention. His touching humbleness reminds us of another man deeply involved in the history of ICU. That is Hachiro Yuasa, the inaugural president of the university. "Yuasa Hachiro and the 20th Century" written by Professor Emeritus Kivoko (Cho) Takeda is a valuable work for understanding the personality of Yuasa. The more we read this book, the better we get to

know the independent character of Yuasa and that he would not serve anything or anyone but God. The book cites the words of Otis Cary, an American missionary who taught at Doshisha University, depicting Yuasa as a "loner." Cary didn't mean that Yuasa was a lonely man but that he wasn't lonely even when he was alone. Yuasa seemed to have avoided being awarded or highlighted for his accomplishments. Being a humble man like that, Yuasa respected Miyazawa who was living his life with devotion to daily labor, free of complaints, excuses, or arrogance. To conclude this article, the following is an excerpt from Yuasa's essay titled "Ai See Yu Shiken (My personal views about ICU)" distributed in celebration of his 70th birthday.

I suppose the only stone monument that

I built on ICU campus would speak for how I tried to practice my fundamental belief of respect for humans. The monument is placed beneath a pine tree that we planted -and still stands in front of the library- in commemoration of the signing of the San Francisco Peace Treaty in 1952, which marked the beginning of a new international order. Princess Chichibu, Honorary Councilor of ICU; Dr. Kiyoshi Togasaki, Chairperson of the ICU Board of Trustees; Dr. Fusaaki Uzawa, Chair of the Board of Councilors; and myself as ICU President attended the tree-planting ceremony, but there is another name inscribed on the stone monument. It is the name of our gardener, Mr. Yoshiharu Miyazawa. Mr. Miyazawa took loving care of every plant on ICU campus as large as 1.320.000 square meters. without missing a day from the founding of the university till he finished his exemplary life. He voluntarily committed his whole life to sincerity and faith. I feel that I am not even worth kneeling at his feet to unloose his shoelaces. He was an exemplar of the virtues that ICU aspires to develop in our students. When we built the stone monument, I asked all the names to be inscribed in the same size using the same font and should there be a need to exclude someone's name, due to the surface area of the stone or anything, I asked my name to be excluded first, and if there was space for only one person's name, inscribe Mr. Miyazawa's name. Fortunately, the monument came out just the way we wanted it to be, but where in Japan is there a university like this? This is one example of how ICU respects individuals as humans, regardless of social status or title and free from mundane conventions.

お邪魔します! あのメジャー

情報科学 石橋圭介准教授 第22回

ISHIBASHI, Keisuke

国際基督教大学 准教授

東北大学大学院理学研究科修了。博士(情報理工学)。2018年よりICUに 着任。専門は情報ネットワーク、通信工学、情報ネットワークセキュリ ティ。研究課題として、「ICTシステムへの潜在需要の推定および潜在需

要に基づくリソース設計制御方式の研究 (2019-2021)」などに携わる。

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回のメジャー紹介は、自然科学の領域から情報科学を取り上げます。 コンピュータやソフトウェアをはじめ、私たちにとって身近な存在である情報科学。 今回は石橋圭介准教授にお話を伺いました。

文・写真: 谷澤聡(本誌)



情報科学とリベラルアーツの 両立へ

ICUではリベラルアーツをはじめ普 遍的な思惟を学んでいきますが、情報 科学はコンピュータやプログラム等に 接するため、実学的なメジャーとして 普遍性と対局にあるように捉えられが ちかもしれません。そこで我々は、普 **遍的なものと実学的なものをどう両立** していくかに配慮しながら進めていま す。

情報科学メジャーの中にも、理論的 かつ普遍的な領域もある一方で、すぐ に活用できるプログラミングやソフト ウェアエンジニアリングのような実践 的な知識もあります。ICUで学ぶので あれば、理論にフォーカスするのがよ いという視点もあるかもしれませんが、 ICUの卒業生には、情報科学メジャー でなくてもIT企業で働く人も多いです し、実践的な部分を含めて広く一般的 な教養として情報通信技術を教えてい かなくてはと思っています。情報科学 に携わる者として、どうやって理論と 実践の二つを両立しながらカリキュラ ムを組んでいくかを考えています。

個人的には、実用的な知と普遍的な 知は対立するものではなく実用と普遍 の両立をリベラルアーツとして教える ことは可能であると考えており、それ を情報科学メジャー教育のチャレンジ としていきたいと思っています。

道具としての情報科学

情報科学には道具としての側面があ ります。情報科学以外のメジャーで発 生している課題を、情報科学メジャー という道具で解くという掛け算を進め ていくということにつながります。例 として、教育分野に先端技術を導入す るEdutechのように、生徒1人1台 のコンピュータと高速ネットワークを 整備するGIGAスクール構想や、各児 童の正誤を分析して一人一人に最適な 問題を導き出す「教育の個別最適化」 などが挙げられますが、データを使っ て意思決定をしていくということが、 非常に重要です。

ICUで情報科学を学ぶ意義の一つ に道具を使う目的、「なにを最適化し たいか」を考えていける点がありま す。例えば、企業なら最適化すべき ことは長期的な利潤かもしれません が、社会科学や政策においては最適化 する対象が価値基準となってきます。 COVID-19禍において、経済と医療 のどちらを重要政策とするかといった ケースです。シミュレーションやモデ リングを活用して、「こうなります」 とは言うことはできますが、情報科 学は「こうあるべき」とは示してはく れません。その目指すべき価値基準を、 人文系など他のメジャーから考え方の 軸を学ぶ機会は多くあります。ICUで の学びや対話を通じて複数の多様な価 値基準の中からどう根差していくか、

そしてゴール設定のプロセスを模索す ることが、ICUの中で学ぶ意義の一つ であると思っています。

情報科学の最も重要になりつつある トピックとして、データサイエンス、 AIがあります。ICUでも注力すべき点 として強化を検討しており、情報科学 メジャーだけでなく全学で協力しな がら進めています。昨年度から経済学 の先生と一般教養科目の科目を開講し ていますが、来年以降はさらに自然科 学と社会科学、人文学の先生方が連携 して統計やデータサイエンスの授業を 作ろうという構想を持っています。数 学・情報を道具の観点で活用し、社会 課題をどう解決するのかという観点で、 データサイエンス系の教育を進めてい こうと話をしています。「道具を使っ て問題を解く」という考え方を、一般 教養レベルで教えていこうと思ってい ます。ICUでデータサイエンスを教え るからには、他のメジャーとの組み合 わせを進めて、「道具と、道具の使い 方」という考え方を意識しています。

講義を通して伝えていること

私の講義では、様々な技術の仕組み やメカニズムを理解してもらうことに 重きをおいています。例えばソフトウ ェアは、ライブラリが予め提供されて いることもあるので、その中の構成が どうなっているかを知らなくても道 具として使えてしまいます。授業で は、技術の裏側にあるメカニズムを教

えたいと思っています。その上で、自 分で作りあげられると理想的です。例 えば、いま教えている機械学習では、 Pvthonのライブラリを使うことを教 え、その上で数学的なバックグラウン ドを伝え、簡単なところは自分で実装 するという形を取っています。数学は 行列や微分など、学生にとってはハー ドルが高いところもあるかもしれませ んが、楽しく進めています。また、学 生からは「数学ってこんなに面白かっ たんだ」、「数学を勉強しなおそう」と いう声ももらっています。学生によっ ては、数学のバックグラウンドがなく ても授業を受けることもありますが、 なにより技術に慣れ親しんでいただく ことが重要であると感じています。

今後の展望・メッセージ

ICUで自分なりの価値基準の中で他 人の価値基準と対話をして、合意を形 成する能力を身につけて頂きたいです。 その上で、情報科学のメジャーで学ん だ道具を、他のメジャーと連携しなが ら使いこなして頂きたいという思いが あります。ICUにはメジャーが31も あって、1メジャーあたりの担当教員 数が圧倒的に少ないです。特に情報 科学は、それだけで一つの学部や大学 にもなる規模であるため、その部分は 上手くカバーリングをしていきたいと 思っています。そして、学生には情報 科学の規範を身につけてもらった上で、 他のメジャーとの連携を経て、さらな る価値基準を養って頂きたいです。

情報科学のデータ

●開講されている主なクラス (2021年度現在)

コンピュータ基礎 プログラミング基礎

情報科学実験

コンピュータアーキテクチャ

オペレーティングシステム アルゴリズムとデータ構造

データサイエンス概念

オブジェクト指向論

データベース論

ソフトウエア開発

情報ネットワークセキュリティー

数値解析入門 など

●担当教員(2021年8月現在)

石橋 圭介

太田 啓路

尾崎 敬二 鏑木 崇史

クティチネ マツ, アンドレア

From The Alumni House

アラムナイハウスから

香川支部新人歓迎会報告

文:香川支部支部長 浜崎直哉 (37 ID93)



2021年5月16日(日)、香川支部新人歓迎会をオンラインにて開催いたしました。当初はオープンエアな状況のヨットクルージングにて開催予定でしたが、香川県のコロナウイルス感染状況が急激に悪化したため、急遽オンライン開催に切り替えました。当日は27期から63期までの、12人の香川県・岡山県在住の卒業生が参加しました。

今年から香川支部に加わった、塩出 道子さん(34 ID90)・鈴木望さん(55 ID11)・石井花さん(63 ID19)を中心 に、自己紹介や近況報告などを行い、 次は実際に会えることを願って会は終了し ました。

支部発足以来、順調に参加される方が増えていまして、昨年と今年で6人メンバーが増え、参加メンバーが40人となりました。特にID10世代の方がこの2年で増えて10人となり、5期生から63期生まで幅広く、また各世代にバランス良い人数構成になってきています。また、岡山県からも2人の方に参加いただいています。

どうしても転勤される方が多い場所柄であり、できた繋がりを大切にするために、香川から離れられた方でも、その方が希望すれば支部の連絡を送り続ける、県外会員制度を取り入れたことも、良かったように思います。(県外会員が9人いらっしゃいます)県外会員の方が、香川に遊びに来られた時に、また集まったり良い関係が生まれています。

卒業生が少ないと思われている地方で、こんな所に卒業生がいるんだ、という嬉しい繋がりをつくっていくために、親睦を大切にして、運営を続けていこうと思っています。

Financial ICU プレゼン× Networking開催報告

文:新井亮一(32 ID88)



今回(2021年3月28日)は、3日前に卒業式を終えたばかりの卒業生本田岳さん(65 ID21)から、「ICU生が考えるESG投資」と題して、ブルームバーグが主催した学生投資コンテストで優勝したESG投資戦略のプレゼンをして頂き、参加者との質疑の後、Networkingの懇親会を行いました。

このブルームバーグ投資コンテストは、金融情報会社のブルームバーグが大学生を対象に毎年開催しているもので、ESG投資の戦略を競うものです。本田さんが参加した2019年は、全国から59のチームが参加し、この分野を専門とする大学研究者、運用会社の実務統括責任者等の厳正な審査の結果、本田さんのICUチームが見事、優勝を勝ち取りました。

本田さんのICUチームが考えた戦略 は、異なる二つの投資戦略の組み合わ せでした。一つは、ESG以外に、小 型株効果(小さい時価総額)、割安株 効果(PBRが低い銘柄)、低い倒産確率 (CDSスプレッド1%未満)に絞り、業 種、採用株価指数でも絞り込んでESG スコア上位銘柄に投資するものです。も う一つは、将来の株価変化率を考慮し て、社長が交代して今後経営の変化が 期待できる企業の中で、敢えてESGの スコアが低い銘柄に絞り、売上成長率と 利益率が高く今後のESGへの取り組み のための余裕がある企業に投資する、と いうものでした。 いずれも単にESGだけ に着目して投資するのではなく、他の投 資指標と組み合わせて安定した高い収益 を目指すもので、参加していた現役のべ テランファンドマネージャー、マーケット・ エコノミストからも「完成度が高い」と感 嘆の声が上がっていました。

その後の懇親会では、新卒入社間近の本田さんがいたこともあり、参加者の新人時代の思い出話に花が咲き、タテカン、ヨコカンというお札の勘定の話などで盛り上がりました。

Financial ICU支部は、金融業界や財務関係のICU同窓生にビジネスやキャリアデベロップメントに活かせる交流の場を提供し、また大学や後輩学生のためのサポートを提供しようという目的で2017

年に設立されました。企画などの持ち込 みも大歓迎です。

こちらへご 連 絡ください: icuaa. financial@gmail.com

第2回 ICUICUコーヒー×ワイン・ アワー報告

文:益子歩鞠(64 ID20)、久松彩音(63 ID19)、 山田智之(44 ID00)







2021年3月28日に、第2回ICU ICUコーヒー×ワイン・アワーをZoom で開催しました。

第2回の今回は「~ SDGs時代の国際協力~ ODA実施期間のシゴトの実際 JICAの中堅と若手が語る」というタイトルのもとに3人の現役JICA職員が発表を行いました。

山田智之(ID00) は「JICA・楽天の包括連携協定 SDGs達成に向けた思いをシゴトにする」というテーマで、2021年2月に締結されたJICAと楽天の包括連携協定を中心に、国際協力分野における民間セクターの役割について発表いたしました。

益子歩鞠(ID20) と久松彩音(ID19) は、「ICUからJICAに入って:入る前の思いと入ってからの現実」として、1年目職員(2021年3月当時)から見たJICAの仕事内容や所感について発表しました。

事前参加登録人数は41人、当日の参加人数は最大35人と、今回も多くの方に参加いただき、質疑応答や後半の交流会も大変盛り上がりました。また、今回はJICA新卒採用が開始する3月の開催ということで、現役ICU学生にも広く広報を行ったため、多くの現役学生の参加があり、交流会でも進路に関する相談などもありました。

ICUICUコーヒー×ワイン・アワーは 今後も不定期に実施予定で、下記ICU 同窓会サイトあるいは下記Facebook コミュニティにてご確認ください。 当イベント広報サイト (同窓会Webサイト): https://www.icualumni.com/ chapters/icuicu-chapter 事務局メールアドレス:

icuicu.secretariat@gmail.com フェイスブック:

https://www.facebook.com/ groups/260732654115164/

桜リサイクルプロジェクト室の 活動報告

文: 同窓会・桜リサイクルプロジェクト室 大澤正明 (25 ID81)



私達、桜リサイクルプロジェクト室は、朽ちて伐採された構内の桜の木材から製作したグッズを販売し、その売上の一部を植え替えの資金として大学に寄付しております。

昨年伐採された桜材の加工が済み、 大学が用意してくれた構内の倉庫でグッズとして生まれ変わるのを待っています(写真はプロジェクトメンバー3人で搬入作業後に撮影)。今回はスマホスタンドが新たにラインアップしました(下記参照)。また、これからは大学側でも多種の木材を用いてグッズの製作が行われますので、同窓会と大学とのコラボも期待できます。

学生時代の原風景の一つである桜並木を思い出していただき、その再生のために気に入ったグッズを購入して頂ければ幸いです。

グッズとして製作されるアイテムの ご要望もお待ちしております。

桜グッズに新商品の スマホスタンド誕生!



伐採されたICUの桜から、新商品のスマホスタンドができました。

デザインを担当してくださったのは、美 術部OBの山田詩津夫さん(23 ID79) です。国際基督教大学の「国際」→地 球→円、「キリスト教」→十字形、「大学」 →桜というイメージで制作。十字形の輪 郭はI、C、Uから成るものです。

幅70mm×奥行き80mm×高さ110 mm(組立時) 価格は1500円です。 商品詳細は同窓会Webサイト(https: //www.icualumni.com/activities/ goods/)をご覧ください。ご購入希望 の方は、ICU同窓会事務局 (aaoffice@ icualumni.com) まで、お名前、購入 数、送付先を明記の上、ご連絡ください。 追って送料と振込先口座をお知らせしま す。ICUアラムナイショップ(https:// shop.icualumni.com/) からもご購入 可能です。



寄付者御芳名 Donors

齋藤顕一(17)

貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうござ います。

たずね人 Missing

池田英人(35 ID91) 深見淳 (43 ID99) 田中智己(49 ID05) 市村脩一郎(57 ID13)

動静をご存知の方は事務局までご一報く ださい。

訃報 Obituary

青柳清孝 ICU名誉教授 根津真知子 元ICU教授 林礼子 元職員

木戸節子 元職員

森山茂芳(1)

西村春夫(2)

加藤英明(2) 横山杉子(4)

柏木久子(4)

荒井文子(5)

吉橋伊都子(5)

久保毅(6)

安藤靖子(6)

上野理子(7)

坊野清之(8)

杉本進(8)

泉国文(10)

岡田本(11)

近藤敏英(16)

安藤元一(17)

鈴木貴志子(18)

村地淳子(20)

井坂文夫(20)

小野貴弘(26 ID82)

橋本有子(39 ID95)

心よりお悔やみ申し上げます。

ICU祭のご案内

2021年ICU祭は10月30日(土) と31日(日) に「ミーティングを起動」をテーマにハイブリッド形式で開催の予定(来 場は在学生限定)です。ICU同窓会では、10月30日(土) 午後 1 時半開演 [2021 ICUホームカミング: 竹内弘高理事長 トーク『教育者としての心得』」(大学・同窓会共催)をオンライン開催します。詳しくは同封チラシをご覧ください。 ICU祭やホームカミングについては、同窓会WebサイトやFacebookで適宜発信していく予定ですので、ご参照ください。 文:長谷川攝(同窓会大学・募金部担当副会長)

ICU Festival

The 2021 ICU Festival will be held on October 30 (Sat.) and 31 (Sun.) in a hybrid format (on-site activities for the ICU current students only). The festival theme of 2021 is "Launch meeting!" ICUAA and ICU will jointly hold ONLINE event, "2021 ICU Homecoming - 'My Story as an educator' by Hirotaka Takeuchi, Chair of the ICU Board of Trustees". Start at 13:30, October 30 (Sat.). Please refer to the enclosed flyer. More information about the ICU Festival and Homecoming Event can be found on Alumni Associations website and Facebook in due time.

Setsu Hasegawa, Vice President in charge of University & Fundraising Section

DAY賞候補者をご推薦ください -

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方 (卒業生・留 学生・教職員。ただし故人は対象外)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した 方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

- ※推薦は年間を通して受け付けておりますが、前年10月15日受付分までを選考対象として翌年の桜祭りで受賞者を表彰します。
- ※受賞者は同窓会Webサイトで発表するとともに、アラムナイニュースでお知らせいたします。
- ※推薦および選考については公開されません。
- ※自薦・他薦を問いません。

※推薦方法 WebフォームからもDAY賞候補者推薦ができるようになりました!

https://www.icualumni.com/activities/day/

Webサイト の「DAY賞」のページから [推薦フォーム] に、あるいは [推薦用紙PDF] をダウンロードして、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてにお送りください。 郵送/FaxまたはE-mailで受け付けております。

※必要事項

- ・推薦したい方の氏名と卒業年、あるいは在籍年(分かる範囲で)
- ・推薦理由(新聞記事などの客観的資料があれば併せてお送りください)
- ・あなた(推薦者) の氏名と卒業年
- ・あなた(推薦者)の住所・Tel.・E-mailアドレス
- ※歴代受賞者名もWebサイトに掲載しております。



ICU同窓会事務局

〒181-8585東京都三鷹市大沢3-10-2 TEL&FAX: 0422-33-3320

E-mail: aaoffice@icualumni.com

事務局からのお知らせ

★ 広告募集!

本誌では広告を募集しています。 フルサイズ6万円、ハーフサイ ズ3万円で承っております。ご 興味のある方は、詳細を事務局ま でお問合せください

★ 原稿をお寄せください!

期会、リユニオンなどの案内・報 告をお寄せください。本誌および Web サイトに掲載いたします。

★住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際は メール (aaoffice@icualumni.com) または同窓会のWebサイトの住 所変更から、ご一報ください。地 方・海外にご転勤の際には支部を ご紹介いたします。同窓会事務局 までお問合せください。 携帯の方 はこちらからどうぞ:



★ ご協力をお願いします

大学の宣伝=大学への支援という 考え方から、同窓生の著作、雑誌 インタビューなどには、略歴欄に 「国際基督教大学卒業」とお入れ いただけますよう、お願い申し上 げます。

松本中央法律事務所

Matsumoto Central Law Office

弁護士 松本 典子

(ID01・45 期・理学科生物学専攻卒業) 懇切丁寧に対応いたします。 お気軽にお問い合わせください。



5103-0016

東京都中央区日本橋小網町8-2 BIZMARKS 日本橋茅場町3階 念:03-5776-2435 Fax: 03-6732-1762 E-mail: n.matsu@m-laws.jp

取扱分野:企業法務一般・契約締結交渉・離婚・男女問題・遺言 相続・環境問題・労働問題・債務整理・刑事弁護等



STAFF

EDITOR IN CHIEF

新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)

MANAGING EDITOR

松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS

鈴木 律 SUZUKI, Ritsu(23 ID79) 望月厚志 MOCHIZUKI, Atsushi(26 ID82) 池島広子 IKESHIMA, Hiroko(27 ID83) 神内一郎 JINNAI, Ichiro(33 ID89/G1992) 谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi(54 ID10) 滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro(62 ID18)

ART DIRECTOR

佐野久美子 SANO, Kumiko(44 ID00)

PRINTING DIRECTOR

坂井健 SAKAI, Takeshi(小宮山印刷)

EXECUTIVE DIRECTOR

松島眞理 MATSUSHIMA, Mari(36 ID92)

PUBLISHER

櫻井淳二 SAKURAI, Junji (28 ID84)

cover photo: ICU アーカイブス backcover photo: 同上

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみなさまのために制作しているものです。 今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか?企画、取材、執筆、撮影、編集進行等を一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいやれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

■大学・同窓会に関する情報が満載です。

ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト

https://www.icualumni.com/

同窓会 Facebook

https://www.facebook.com/icualumniassociation 大学 Web サイト https://www.icu.ac.jp/ JICUFWeb サイト https://www.jicuf.org/

■ ICU 同窓会事務局

〒 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL&FAX: 0422-33-3320
Email: aaoffice@icualumni.com

